



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地方都市における子育てと資源 : 保育所利用世帯に焦点をあてて
Author(s)	保田, 真希
Citation	教育福祉研究, 20, 59-94
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58346
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN10264662_20_59-94.pdf



地方都市における子育てと資源 —保育所利用世帯に焦点をあてて—

保 田 真 希

はじめに

本稿の目的は、北海道A市において、市内にある5ヶ所の認可保育所を利用している3歳児の親すべてを対象として行った聞き取り調査の一部を整理し、地方都市において子育てがどのように営まれているのか、その地域の特徴や地域の社会資源とどのように関係しているのかを明らかにすることである。

本稿は実際に聞き取りによって得られたことのうち、①妊娠・出産期の生活、②現在の生活について調査結果を示す。その際、「本報告の着眼点」(1章第4節)で述べるとおり、①地域の社会資源、②本人が持つインフォーマルな社会資源、③本人の行為・意識の3点に注目する。

なお、本稿の構成は次のとおりである。1章では調査の概要について示し、2章で調査協力者の基本属性について整理をする。3章では妊娠・出産期にどのように生活をしているのかについて、結果をまとめる。4章では保育所を利用している現在の生活について、どのように生活を営んでいるのか、保育所がどのような役割を果たしているのか、についてまとめる。「結果のまとめ」では、①地域の資源、②本人が持つインフォーマルな社会資源、③本人の行為・意識の3点に着目して考察する。

1. 調査の概要

(1) 調査の概要

本稿は、科学研究費・基盤B「地方都市における貧困の世代的再生産の構造と政策的対応に関する実証的研究」(2013～2015年度、研究代表者：松

本伊智朗)によるものである。本調査は、A市にある5ヶ所の認可保育所を利用している3歳児の親すべて(61世帯)を対象とした悉皆調査である。各保育所を通じて依頼文を配布し、協力を得られた45名に対して、個別に半構造化インタビューを行った。調査員として2～3名が1組となり、1名が質問をし、残りの1～2名が筆記係として聞き取りの内容を記録した。この記録をもとに、以下、結果を整理、分析していく。なお、本稿で扱う事例については、引用文のうしろにケース番号を示して使用する。

(2) A市の特徴

ここでは、子育てを行う場所としてのA市の特徴について示す。A市には認可保育所が5ヶ所ある。5ヶ所すべての保育所で延長保育を行っており、朝7時から午後7時まで開所している。そのうち、公立保育所1ヶ所と私立保育所1ヶ所の2ヶ所で、障がい児保育(集団保育が可能な程度の児童)を行っている。

育児についての悩み相談、情報交換、親子遊びの体験広場など、子育て最中の保護者同士のコミュニケーションを通じて友達の輪、子育ての輪を広げる場所として、子育て支援センターが私立保育所2ヶ所と公立保育所の1ヶ所、計3ヶ所の中にある。子育て支援センターを設置している3ヶ所の保育所では、仕事や病院、冠婚葬祭など一時的に保育が必要な場合に預けることができる「一時保育」を行っている。

A市は道北地域の中核都市であるB市の近隣に位置し、市内に総合病院や大学があり、買い物をする場所や遊び場、大きな公園や健康施設、複数の保育所や幼稚園、市役所や保健センターなどの

公共施設が比較的にコンパクトな範囲にある。

(3) 倫理的配慮

本調査は、北海道大学大学院教育学研究院における人間を対象とする研究倫理審査の承認を受けている。また、聞き取りを始める前に、協力者に対して調査の趣旨や概要、データの取り扱い方法などを記載した資料を提示し、資料に沿って口頭で説明し、データの利用に関する同意を得ている。本稿は協力者の匿名性の保障と個人情報保護に基づき、個人の特定がなされないようにデータの加工や修正を行っている。

(4) 本報告の着眼点

保育所は地域で子育てをする際に利用できる社会資源の1つである。「3歳」という年齢は、多くの子どもが保育所（あるいは幼稚園）に通い始めること、その一方で、この時期はまだ学校のことにとらわれず、子育てをしている時期でもある。保育所を利用している3歳児をもつ親に着目することで、地方都市でどのように子育てを行っているのか、その地域の特徴や社会資源とどのように関わっているのかが見えてくると考える。

そこで、本稿は、地域の社会資源や制度とのかかわりで、以下の3つのことに注目する。

第1に、その地域の社会資源や制度が子育て生活にどのように影響しているのか。例えば、市の保育サービスや医療機関などが子育て生活にどのように影響しているのかである。健診や保健師の訪問、保育所を利用できる時間、出産する病院や病気・けがをした時にどこの病院を受診するかなどである。具体的な項目としては、「出産した病院と居住地」「出産する病院選び」「保育所の良い点と改善点」「要望」「地域の条件と資源の制約」などである。

第2に、本人が持っているインフォーマルな社会資源・社会関係が子育てとどのように関わっているのか。例えば、妊娠・出産の時期や子育てをしている際に、実家や友人からどのようなサポートがあったのか、働く時間を調整する際に、職場からの配慮を得られているのか等である。具体的な項目としては、「(妊娠・出産期) サポート」「世

話できないときのケアの担い手とサポート」などである。

第3に、子育て生活をする際に、個人の行為や意識がどのように関わっているのか。例えば、仕事や家事・育児の分担をどのように行っているのか等である。具体的な項目としては、「家事・育児の分担」「仕事」「予防接種・病気・けがの時に連れて行く人」「保育所の送り迎え」「情報の入手」などである。

2. 基本属性

(1) 調査協力者

A市にある5ヶ所の認可保育所を利用している3歳児の親すべて(61世帯)を対象とした悉皆調査である。各保育所を通じて、依頼文を配布し、実際に協力を得て聞き取りを行った世帯は45世帯である。調査協力者は、女性(母)が42名、男性(父)が3名であった。

このように、調査協力者の約9割が女性であるため、回答に偏りが見られるかもしれない。しかし、本稿は地方都市でどのように子育てをしているのか、その地域の社会資源とどのように関係しているのかについて整理をしていくため、分析には男性が答えた3ケースを含めた45例を対象として分析を行っていく。また、年代別に見ると、20代が12名、30代が25名、40代が8名で、30歳前後が多い。

(2) 家族形態

家族形態については、「父+母+子」が37例、「父+母+子+祖父母」が2例、「母+子」が3例、「母+子+祖父母」が1例、「その他」が2例あった。

(3) 仕事

ここでは、母(45人)と父(43人)の現在の仕事、職種について簡単に整理する(表1-1、表1-2)。なお、職種が不明なものは「不明」とする。雇用形態については、不明なケースが多いため、今回の結果には含まないこととする。

母の職種は、看護師や保育士、介護士、福祉施設の支援員が多く、ケア労働従事者が多いことが

表 1-1 母親の職業
(単位：人)

介護・福祉職	6
保育士	5
看護師	5
農業	5
自営業	5
自衛官	1
保健師	1
市役所職員	1
教員	1
保険外交員	1
事務職	2
会社員	1
アパレル（販売員）	1
その他	8
不明	1

表 1-2 父親の職業
(単位：人)

自衛官	10
消防士	1
理学療法士	1
市役所職員	1
自営業	6
農業	5
飲食店	2
衛生施設事務組合	2
会社員	2
アパレル	1
動物病院	1
その他	8
不明	5

論じていく。地域移動の類型・出身については、表 1-3 のように整理をし、移動の理由については表 1-4 で整理をした。その際、移動タイプを「A 市定住型」（A 市出身でずっと A 市に在住）、「A 市 U ターン型」（A 市出身で、一度市外に出た経験のある U ターン組）、「転入型」（A 市以外の出身で、A 市にきた）の 3 つに区分した。なかには、A 市出身であるが、定住型なのか U ターン型なのか不明な事例もあったため、それらは「A 市出身・型は不明」と記述した。その他、離別等、地域移動が不明な事例は「不明」と記載している。

調査協力者の出身（表 1-3）については、母（妻）が 24 人、父（夫）が 20 人で、両者ともに転入型が最も多い。次いで、母（妻）15 人、父（夫）12 人で、A 市 U ターン型が多い。

次に、A 市 U ターン型と転入型の理由について、母（妻）と父（夫）のそれぞれの理由を整理していく（表 1-4）。

A 市 U ターン型の、A 市に戻った理由を整理すると、母親 15 人のうち、「就職・仕事関係」が 7 人で最も多く、次いで 3 人で「その他」（高校卒業後に市外の学校に進学したが、途中から自宅通学に戻した事例や親元に戻りたくなった事例や、結婚で A 市の近隣都市にある夫の実家近くに引っ越したが、A 市の住宅に空きが出て引っ越した事例）である。その他、「結婚・離婚」で戻った事例や「な

わかる。一方で父の職種は自衛官、消防、市役所職員などの公務員が多く、ケア労働に従事している者は理学療法士 1 名である。男女で就く仕事が変わっている傾向が見てとれる。

（４）調査協力者の出身

本稿では、地域的な条件のみではなく、本人がもつインフォーマルな社会資源をどのように活用しているのかについても焦点をあてる。そのため、ここでは、調査協力者の地域移動の特徴について

表 1-3 調査協力者の出身 (単位：人)

	A 市定住型	A 市 U ターン型	A 市出身・型は不明	転入型	不明
母	5	15	1	24	0
父	5	12	4	20	4

表 1-4 U ターン型と転入型の移動の理由（複数回答を含む） (単位：人)

	結婚・離婚	自身の仕事	配偶者の仕事	大学・高校進学	その他	なんとなく	不明
U ターン型 (母)	2	7	1	0	3	2	0
U ターン型 (父)	0	11	0	0	0	0	1
転入型 (母)	7	7	7	3	0	0	0
転入型 (父)	1	16	0	1	1	0	4

んとなく」で戻った事例がそれぞれ2例ずつである。一方で、父親12人のうち、「就職・仕事関係（家業を継ぐも含む）」が11人で、あとの1人は「不明」であった。

次に、転入型の理由について整理する。母親24人のうち、「結婚」と「夫の仕事関係・転勤」が各7人ずつで最も多かった。次いで、「自身の就職・仕事」が7人で、「大学進学」が3人であった。一方で、父20人のうち、「就職・転勤などの仕事関係」が16人で最も多く、「結婚」「高校進学」「その他（A市出身の父のお骨を持ってきた）」が各1人ずつあった。

以上のように、A市Uターン型においては、妻（母）も夫（父）も「就職・仕事関係」を理由にA市に戻るケースが多かった。転入型の理由を概観すると、夫においては「結婚」はわずか1人で、「就職・転勤などの仕事関係」が約8割を占めている一方で、妻は「結婚」や「夫の仕事関係・転勤」を理由に転入した事例が最も多く、夫の動向に左右されている傾向があった。

2. 妊娠・出産した時期の生活

ここでは、妊娠・出産期をどのように生活しているのかについて、調査結果を述べていく。特に、「出産した病院とその居住地」「出産する病院選び」「育児・出産に関する情報」「保健師の訪問・健診」「家事や育児の分担とサポート」「仕事」「市への要望」の7項目について整理していくこととする。

ここで、調査結果の整理を始める前に、なぜ、この7項目について整理をしていくのかについて簡単に説明しておく。この7項目は大きく分けて、3つの意味・理由をもっている。

第1に、その地域の社会資源や制度が子育て生活にどのように影響しているのかを把握するためである。特に、妊娠・出産をする病院をどのように決めたのか、その地域・その病院で妊娠・出産をする際にどのような面が良かったのか、どのようなことを改善してほしいと感じたのかを把握するためである。そのために、「出産した病院とその居住地」「出産する病院選び」「市への要望」につ

いて整理する。

第2に、妊娠・出産をする際に本人がもつインフォーマルな社会資源・社会関係が生活とどのように関係しているのかを把握するためである。特に、妊娠・出産する時期に、実家や友人、近所からどのようなサポートがあったのか／なかったのか、妊娠・出産にかかわる情報を誰から聞いていたのか、その際「定住型」「Uターン型」「転入型」でどのような特徴があるのかを把握するためである。そのために、「サポート（家事・育児の分担とサポートの項目）」「育児・出産に関する情報」について述べていく。

第3に、実際に、妊娠・出産する時期に仕事や家事、育児（他に子どもがいる場合）をどのように行っているのかを理解するためである。これは、個人の意識や行動が生活とどのように関わっているかを把握することにもつながる。そのために、「家事・育児の分担」「仕事」について、結果を論じていく。

以上のように、実際に妊娠・出産期の生活をどのように営んでいたのかを検討するために、①出産する病院をどのように選んだのか、地域的な条件や地域的な資源の制約にはどのようなものがあるのか、②誰からどのようなサポートを受けているのか、③どのように仕事や家事、育児などを行っているのかについて、上記の7項目を整理する。

（1）出産した病院とその居住地

ここでは、どこで出産をし、出産をした病院はどこかについて確認する。特に、出産する病院をどのように決めたのかについて、病院を選ぶ際にどのようなことが関係しているのかを整理していく。子どもの数が1名のケースは8例、2名のケースは23例、3人以上のケースは14例であり、子どもが1人の場合は、出産した病院も1ヶ所である。しかし、ここでは子どもの人数にかかわらず、出産した病院が「1ヶ所」であったケース31例と「2ヶ所」であったケース14例について、それぞれの特徴を整理していく。特に、どこの病院で出産するのかを決める際に何が関係しているのか、そこで見られる特徴を整理することに重点を置

く。

1) 出産した病院が1ヶ所であるケースの特徴

ここでは、出産した病院が「1ヶ所」であるケース 31 例のうち、居住地が変わった 3 例(2 例は A 市内の病院、1 例は B 市で出産)を除く、28 例の出産した病院と居住地について、簡単に表に整理をした(表 2-1)。ここにはきょうだいが複数の場合と一人っ子の場合の両方が含まれる。

表 2-1 出産した病院と居住地(同じ居住地で出産した病院が1ヶ所のケース 28 例の内訳)

A市の病院で出産・A市に居住	21
B市内の病院で出産・A市に居住	6
B市内の病院で出産・B市に居住	1

表 2-1 をみると、出産した病院が1ヶ所のケース 28 例の内訳は、「A市に住み、A市の病院で出産した」ケースが 21 例で最も多く、「A市に住みながらB市内の病院に通って出産した」ケースが 6 例、「B市に住んでB市内の病院で出産した」ケースが 1 例あった。では、なぜ、この病院で出産することにしたのかについては、次項で論じる。

(i) 出産する病院選びの特徴

表 2-1 で整理したように、出産した病院が1ヶ所のケースは、①A市に住み、A市の病院で出産したケース、②A市に住み、B市で出産したケース、③B市に住み、B市内の病院で出産したケースの3つに分類できる。ここでは、これら3つの類型別に、出産する病院をどのように選んだのかについて述べていく。

①A市に住み、A市の病院で出産したケースの特徴

ここでは、A市に住み、A市の病院で出産したケース 21 例のうち、なぜこの病院を選んだのかについて明確に語られていない 4 例を除く 18 例について整理する。18 例に共通して、主に 4 つの特徴が見られた。これらの特徴は相互に関係していた。

第 1 に、A市で出産するなら、この病院でしか出産できない、他に産科・産院が無いという地域

的な条件がある。例えば、以下のような理由が話された。

「A市で産むといたら、市立病院しかない」(No.1、17、21)

「A市は市立病院しか産科がない」(No.16)

「A市には1つだし、近いから。B市に行っている人もいるが、そういうところは良いけど、遠いし、別にA市でも良いから」(No.33)

第 2 に、実家がA市あるいはその近隣都市にあり、実家からも近く、通いやすいという理由である。

「自分の地元がどこにあるか、里帰りできるかによって選ぶ」(No.7)

「実家もA市にあるし、通いやすい」(No.40)

第 3 に、働きながらの妊娠・出産であるため、近い病院を選ぶという、仕事を継続することを念頭に置いた理由である。

「自分が仕事している以上、他に行く場所はない。頼れるところは実家しかないので遠くないところ。B市(A市の近隣都市で、中核市)のように産院が何個もあれば選べるけど、B市は距離的に」(No.1)

「仕事の都合で、A市で出産」(No.6)

第 4 に、何かあった時の不安や他の地域の知らない病院に行くことに対する不安などの理由から、近くて通いやすい病院を選んでいるケースがあった。

「B市で産もうとも考えたけど、つわりや体調が悪い時もあるって、B市で産めるかなという思いもあるって、A市の方が良いかなと」(No.8)

「何かあった時に不安なのと、勤務しながらの妊娠だったので、A市での受診と出産にした」(No.36)

「1人目の時はB市で産もうと思ったが、近い所でいいと言われて、2人目の時は破水し、すぐに分娩台に。B市なら間に合わなかった」(No.27)

このように、産める病院が1つしかないという地域的な条件・地域的な資源の制約に加え、何かあっても、すぐに対応できる身近な病院であり、実家が病院に近いこと、さらに仕事しながら出産をするためにA市の病院を選んでいることが読み取れる。

②A市に住み、B市で出産したケース

ここでは、A市に住み、B市で出産したケース6例について、なぜ、この病院を選んだのかについて、整理をしていく。主に3つの特徴が見られた。第1に、6例に共通しているのは、出産の仕方や母子同室、個室、サービスが充実している病院を選んでいるということである。例えば、「親戚や友人の評判がよく、個室やサービスが充実している病院だったため」という事例や「フリースタイル出産で産める。カンガルーケアや母子同室、実家に近く、友人がすでに産んでいて、いいよと評判だった」、「評判のいい病院があるのと、交通の便が良いので。C市(X県の中心都市)から両親が来るときにも都合がいいかと思って」という事例である。

第2に、待ち時間や部屋などについて、B市とA市の病院を比較して選んでいる。例えば、「B市で産みたい、個室がいいと思って。A市の病院は個室ではない」(No.30)や「ネットを見て、2、3回検診し、先生が良かったところを選んだ。A市の病院は待ち時間が長く、6人部屋だし、風呂も共同で嫌だったから」(No.15)という内容があった。

第3に、A市の病院で勤務した経験があり、知り合いがいる・知っている先生に診られるのが嫌だったという理由を述べているケースが2つあった。

待ち時間が長く、個室でもなく、母子同室でもないというA市の病院と比較し、周りの評判がよ

く、サービスが充実している病院を選んでいるという特徴があった。特に、前項のA市に住み、A市で出産したケースのように、実家からの近さや交通の便が良いことを理由とした語りが3ケースあった。

③B市に住み、B市内の病院で出産したケース

このケースは1例のみである。「病院は自宅から近かったので。自分で出産方法を選んで良かった」という理由であった。このように、自宅の近さと出産方法を選べるということから選んでいた。

2) 出産した病院が2ヶ所であるケースの特徴

次に、出産した病院が2ヶ所であるケースの特徴について整理していく。まず、「出産した病院が2ヶ所である」ケース14例の出産した病院と居住地について整理をした。14例を整理すると、「同じ居住地で子どもによって出産した病院が異なる」ケースは7例あり、「子どもによって、出産地も居住地も異なる」ケースが7例あった。

同じ居住地で子どもによって出産した病院が異なるケース7例の内訳は、A市に住み、B市とA市の病院で出産したケースが2例、A市に住み、C市とA市の病院で出産したケースが2例、A市の近隣都市であるG市に住み、B市とA市の病院で出産したケースが1例、D市(道外の遠方地域)でE市とは近隣の都道府県)・E市(道外の遠方地域)でD市とは近隣の都道府県)の病院、H市(道外の遠方地域)在住が1例、A市に住み、F市とA市の病院で出産したケースが1例あった。そのうち、2ヶ所の病院で出産しているケースのうち、1ヶ所はA市内の病院であるケースは6例あった。

では、なぜ同じ居住地で出産する病院が子どもによって違うケースがあるのか。この点については、次項で述べることにする。

次に、居住地も病院も異なるケース7例について簡単に触れておく。その内訳は、G市の病院(K町在住)とB市の病院(A市在住)が1例、B市の病院(J町在住)とA市の病院(A市在住)が1例、C市の病院(L市在住)とA市の病院(A市在住)が1例、C市の病院(道外の遠方地域N)

とA市の病院（A市在住）が1例、I市の病院（O市在住）とA市の病院（A市在住）が1例、M市の個人病院（M市在住）とM市の総合病院（A市在住）が1例、P市の病院（P市在住）とC市の病院（C市在住）が1例である。特徴的なのは、2ヶ所めがA市の病院（A市在住）であるケースが5例あったことである。

(i) 出産する病院選びの特徴

ここでは、出産した病院が2ヶ所であるケースの病院選びの特徴についてまとめる。特に、①同じ居住地で違う病院で出産したケース、②違う居住地で違う病院で出産したケースの2つに分けて、それぞれまとめる。

①同じ居住地で違う病院で出産したケース

同じ居住地で違う病院で出産したケース7例の病院選びの特徴は3つある。

第1に、里帰り出産と居住地の近くの病院で出産しているケースが4例あった。

「割と結婚したら実家という考え、みんなそうだと思っていた（中略）第1子の時は、パートで働いていたが、妊娠して退職して自由だったため、実家で。2人目以降は仕事して時間が無かった。A市の病院で通院してそのままの流れで出産した」（No.9）

「上の子はA市の病院で、下の子はB市の病院。下の子の時は、実家がC市で、年齢が心配だったため」（No.28）

第2に、サービス面・評判と近くの病院で出産しているケースが2例あった。

「知人の評判で病院を選んだ。不妊治療でB市の個人病院に行き、そこの紹介でB市の大学病院にうつった。（2人目は）A市の病院に行くのは当たり前のことのように。この辺に、A市の病院しかないし、みんなそこに行く」（No.42）

第3に、夫の単身赴任先の近くの病院と里帰り出産の組み合わせが1例あった。

②違う居住地で違う病院で出産したケース

違う居住地で違う病院で出産したケース7例の特徴は3つあった。

第1に、周りの情報・サービス面の良さと実家近くの病院を選んだのが3例あった。

「個室があって、分娩台ではなく、畳とかベッドとかで自由な体勢で出産できる、エコーが立体、助産師がいて、検診もしっかりしていた。病院が大きいので、気配りは行き届いていた。第2子の時はA市の病院でA市。6人部屋。2人目もB市で産みなかったが、A市ではA市の病院しかない。6人部屋だったが、個室が良かった」（No.26）

第2に、実家近くの病院と居住地近くの病院を選んだのが3例あった。

「第1子の時はもともと実家が近いのと、私がよく行っていたかかりつけの病院というか、友達のお姉さんが産婦人科で助産師だったので、とりあげてもらった。（第2子の時は）実家の母も仕事をしていて、ずっと見ているのは大変で、里帰り（出産）の時は夫が（出産を）見ることができていなかったの、下の子の時はA市で」（No.41）

第3に、その時に住んでいる住居の近くの病院を選んだケースが1例あった。

(2) 妊娠・出産に関する情報

ここでは、妊娠・出産に関する情報、特に病院に関する情報を誰から得たのかについて整理した（表2-2）。ただし、回答の中には、妊娠・出産に関する情報をどのように得たのかについての回答と、病院を選ぶ際に情報をどのように得たのかについての回答が混在しており、それらを識別できない部分があったため、留意する必要がある。

以下、情報を誰から得たのかについて、「定住型」・「Uターン型」・「転入型」で分類して整理していく。

表 2-2 情報の入手経路（複数回答）

（単位：人）

家族・親戚	16
友人・知人・ママ友	16
地元・実家・経験	7
職場関係	8
母親・父親教室、子育てセンター	8
病院	6
保健師・保健センター	6
インターネット	5
本や雑誌	3
市役所	3
スーパーにあるパンフレット	1
特になし（自然と情報が入る）	8
不明	1

表 2-2 の通り、「家族・親戚」が 16 人、「友人・知人・ママ友」が 16 人で最も多い。「家族・親戚」のうち、「家族」が 11 人で、その内訳は「夫」が 3 人、「きょうだい」が 3 人、「両親」が 5 人であった。地域移動の類型別にみると、「定住型」が 4 人、「Uターン型」が 5 人、「転入型」が 2 人だった。また、「親戚」は 5 人あり、その地域移動の類型別にみると、「定住型」が 1 人、「転入型」が 4 人だった。

「家族・親戚」と同じく、16 人で最も多かったのは「友人・知人・ママ友」である。その内訳は、「友人」が 12 人で、地域移動の類型別にみると、「定住型」が 1 人、「Uターン型」が 4 人、「転入型」が 7 人であり、「ママ友」は 2 例（「転入型」が 2 人）で、「知人」が 2 人（「転入型」が 2 人）だった。

次いで、「母親・父親教室、子育て支援センター」が 8 人だった。その内訳は、「母親教室」が 6 人で、地域移動の類型別にみると、「転入型」が 3 例、「Uターン型」が 2 例、「定住型」が 1 人だった。「父親教室」は転入型が 1 人であり、「子育て支援センター」は Uターン型が 1 人だった。また、「職場関係」も 8 例である。その内訳は看護師が 2 人、医療事務が 1 人、理学療法士が 1 人で、病院関係者

が 4 人、保育士が 1 人、その他に 3 人いた。地域移動の類型別に見てみると、「Uターン型」が 2 人、「転入型」が 6 人だった。

「地元・実家・経験」が 7 人で、子どもの時にきょうだいの子どもの面倒をみた経験が 1 人、「地元」が 3 人、「実家近く」が 3 人だった。その地域移動の類型別にみると、「定住型」が 1 人、「Uターン型」が 3 人、「転入型」が 3 人だった。つまり、地元や実家近くで病院に関する情報を得ていたことが読み取れる。

「病院」は 6 人おり、それを地域移動の類型別にみると、「Uターン型」が 3 人、「転入型」が 3 人であった。同じく、「保健センター」が 6 例あり、「Uターン型」が 3 人、「転入型」が 3 人であった。

「インターネット」は 5 人おり、「定住型」が 1 人、「転入型」が 3 人、「Uターン型」が 1 人であった。

「市役所」が 3 人で、その地域移動の類型は「転入型」が 2 人、「定住型」が 1 人であった。また、「本や雑誌」が 3 例あり、その地域移動の類型別にみると、「転入型」が 2 人、「定住型」が 1 人であった。

「スーパーのパンフレット・チラシ」が 1 人（「転入型」が 1 人）であった。

「特になし」は 8 人あった。地域移動の類型を見ると、「定住型」が 2 人、「Uターン型」が 4 人、「転入型」（結婚・出産）が 2 人であった。例えば、以下のようなものである。

「情報を集めなくても、何もここにしかないという感じ」（No.1、17）

「特別集めなくても勝手に情報が入ってきた」（No.2）

上記の事例から、「特になし」は「地元・実家」のケースと似ている部分もあり、その地域に住んでいることで自然と情報を得ることができていることが推察できる。

以上のように、「家族や親戚」から情報を得ているケースでは、「定住型」や「Uターン型」が多く、

近くに親族が住んでいて話を聞けるという地域的な条件も含まれていた。他の都市からきた「転入型」のケースでは、インターネット、市役所、母親教室の利用や「友人やママ友」、保育士や看護師などの専門職に就いていることで「職場・職場関係者」から情報を聞いているという特徴があった。

(3) 保健師の訪問・健診

ここでは、保健師の訪問と健診について整理をしていく。具体的には、「保健師の訪問回数」、「健診の回数」、「保健師との会話」が役に立ったかどうか等について論じていく。

1) 保健師の訪問回数

回答が無かった人に関しては、「不明」として記載し、「保健師の訪問回数」について整理した(表2-3)。

表2-3 保健師の訪問回数

産後1ヶ月に1度のみ訪問があった	26
産後に数回訪問あり	5
訪問があった時と無い時があった	5
産前に訪問があった	1
訪問はなし	1
不明	7

表2-3をみると、「産後1ヶ月に1度のみ訪問があった」ケースが26例で最も多く、「不明」が7例、「産後に数回訪問あり」が5例、「あった時と無い時があった」が5例、「産前に訪問があった」が1例、「訪問はなし」が1例だった。

「あった時と無い時があった」ケースでは、2つの特徴があった。第1に、第1子の時はあったが、それ以降(下の子もたちの時)はなかったケースである。第2に、上の子の時には訪問が無く、保健センターに行かなければいけなかったが、第3子の時から自宅への訪問が始まったケースである。

次に、「訪問が無かった」ケースでは、健診には参加をし、家族のサポートがあることで断っていた場合がある。例えば、以下のような内容があっ

た。

「健診はちゃんと行った。1ヶ月健診は病院に行ったが、他のは保健センターに行った(中略)保健師の訪問はなし。言われたが、いらないと答えた。近くに母もいるし、夫も協力的だし、何も悩まず、こんなものだと思っていた。なので、来なくていいと答えた」(No.22)

「不明」7例と「訪問なし」1例をあわせた8例を除く37例はすべて「保健師の訪問」を経験していた。複数の子どもを持つケースのうち5例は、保健師の訪問があった場合と無かった場合の両方を経験していた。その背景には、そもそも保健師の訪問がなく、自ら保健センターや病院に行ったケースや特に悩み事が無かったため訪問を断ったケースもあった。

2) 健診の参加

ここでは、健診の参加回数について整理をしていく。45例を整理すると、「母子手帳通りに参加」したケースが33例で最も多く、次いで「健診に行っているが頻度が不明」だったケースが11例、「行けない時もあった」ケースが1例だった。

「行けない時もあった」ケースでは、健診の知らせの有無が関係していた。

「Q(A市の近隣都市)は母子手帳通りにあったが、A市は自分で調べて行かなければいけない時がある。3、4ヶ月はハガキが来て、6、7ヶ月は3、4ヶ月に行ったところで受付けましたよと言われた。9、10ヶ月は知らせが来なくて、自分で調べて行かなければいけなかったが、それが分からなくて行けなかった。1歳の時は自分で調べて行かなければいけないのを知っていたから、自分で問い合わせをして受けた。知らせが来てほしい」(No.11)

このように、地域によって、健診の実施についての案内の仕方に違いがあったことで、行けない時もあったケース1例を除いて、他のケースは全

て健診に参加していた。

3) 保健師との会話

前節までで整理してきたように、ほとんどのケースで保健師の訪問や健診を経験していた。そこで、ここでは保健師との会話がこの時期の女性たちにとってどのような働きをしたのかについて論じる。特に、保健師からのアドバイスや役に立ったことがあったかどうかについて整理していく。ただし、アドバイスの有無や「役に立った」か否かについては、答えた人の主観的な部分が含まれている。

45 例のうち、保健師との会話が「役に立った」ケースが 27 例で最も多かった。特に、基本的な身体測定や栄養指導の他に、その時に気になっていることを相談したり、アドバイスをもらっているという特徴があった。

「保健師訪問では、ご飯を食べない・体重が増えないと相談をしたら、教えてくれた。健診では、2 人目の時は子宮外妊娠で袋が見えないと教えてくれたり、話を聞いてくれた。その後、頭が小さいということで検査をしっかりとってくれたり、相談に乗ってくれた」(No.18)

「基本的には、子どもの体のこと、体重や身長など成長・発育に関することを話してくれた。色々と話ができた、気になっていたこととか。指しゃぶりがなかなかやめられなくて、無理にやめさせず、少しずつ直していくようにアドバイスを受けた。ただ、皮膚に湿疹が出ていたことは保健師には相談しなかった。湿疹のことは皮膚科で聞く、そういうのは保健師には言わない。体の症状とかは病院で聞くのが良いと思うから。」(No.43)

「子どもの体重を量ってどれくらい大きくなっているか、母乳をどのくらい飲んでるか、日割りで計算。あと、不安に感じていることは無いですか？とか下の子が体重の増えが悪かったので、健診以外に保健センターで何回か体重を量ってもらった」(No.30)

次いで「役に立ったことやアドバイスは特になし」が 8 例、「アドバイスがあった時と無いときがあった」のが 1 例あった。「役に立ったことは特になし」のケースでは、困っていることや悩みが無かったり、相談する相手が保健師の他にいるという特徴が見られた。

「特にない。困っていることも相談することも無かった」(No.14)

「体重を測りに来て、困っていることは無いか？という程度。その時は困っていることは無かった」(No.16)

「アドバイスや指導はあったと思うが、覚えていない。特に相談はしていない。私の方は、祖父母、大きいじいさん・ばあさんがいたから、保健師とかと相談していない。祖父母、大きいじいさん・ばあさんが色々と言ってくれるから、従っていた」(No.40)

「医者の励まし、大丈夫という安心する声かけがあって、それが私には心強かったです。保健師からはなし。相談すれば教えてくれるけど、言わなかったら無い」(No.8)

回答が得られなかった「不明」は 4 例あった。その内容は、保健師に関するものではなく、健診に行った時の母親同士の交流に関する回答であったため、保健師との会話については「不明」と記載した。

最後に、「不満あり」が 2 例、「役立った事も不満もあり」が 2 例だった。つまり、「役立った事も不満もあり」の 2 例を含めて、「不満あり」は 4 例あった。特に、「若い保健師の経験の無さに関するもの」が 3 例と「病気に対する回答に関するもの」が 1 例あった。

「第 1 子の時は、J (A 市の近隣の町) では、保健師が若くて、ベテランが来るかと思ったのに…もっと経験のある人が良かった。保健師に聞いても、うーんという感じで、教科書通りの感じで自分で調べて知っていることを言われて

も…第2子の時は、A市で、年配の方で自分の経験も聞かせてくれて、何か困っていることは？と聞いてくれた。街であったりすると、声をかけてくれたりする。あと、夫が自衛隊の奥さんがいて、子どもが小さくて大変だよねと言ってくれた」(No.26：転入型)

「最初の子の健診の時は、私よりも若い保健師で、子どもも産んだことなさそうな独身の人で、『結婚していない独身の保健師がわかっているの？』と思っていた。3番目の時、保健師さんが出産後1ヶ月くらいに1度来たかな…長男と次男の年が近いから、どうですか？と来た。第1子は幼稚園に行っていたから、時間を持て余していたし、出産が年をとってからだったので、イライラしていた。赤ちゃんを連れて外で遊ばなきゃと思っていたけれど、膝の上に乗せて本を読んでいるだけでもいいんだよと言われて…定年間近の保健師だった。」(No.20：Uターン型)

「若い人が多く、子育て中の人で、逆にこれはどうしたらいいのしょうと聞かれた。経験のある人がもう少し入って来てほしい。説得力に欠ける時もあった」(No.27：転入型)

「病気に対して不満が残る回答しかもらえなかった。それ以来、イメージが低下し、頼れる人ではない」(No.7：定住型)

特に、プラスとマイナスの両方の評価をしているケースに着目すると、保健師が自分の経験を語ったり、困っていることは無いかを聞いた際に、不安を解消しているという特徴が見られた。一方で、「不満がある」と回答したケースでは、保健師の対応だけでは不安を解消しきれていないという特徴があった。では、不満が残った4例のケースでは、親族や友人など保健師以外の人で、話ができる相手はいたのかについて整理する。4例とも親族からのサポートがあった。しかし、育児に関する話ができる相手については、2例がいないという状態だった。

「あまり周りの友人が結婚・出産している人が少なくて、あまりそういう話ができなかった。みんなC市やB市に行っていて。A市やJ町には仕事がないから。」(No.26)

「知らない街(A市以外)に行っているから、友人もいなかった。健診も一人だし、知り合いもできないし、(中略)ちょっとさみしい思いをした」(No.20)

以上のように、保健師との会話に不満を持ったケースに着目すると、出産や育児に関して話ができる人が周りにいないという状態や育児に関する話ができる相手がいても、専門的な回答を保健師に求めている傾向があった。これらのことを勘案すると、保健師に対する不満は、ある意味では、専門職としての保健師に対する期待の表れと関係しているのではないだろうか。

(4) 仕事

ここでは、妊娠・出産の時期における仕事について、①仕事の変化、②職場からの配慮について整理する。夫が回答した3例も含んで考察していく。

1) 仕事の変化

妊娠・出産の時期における仕事の変化については、夫の方には変化が無く、女性の方に変化が見られたため、女性のケースに着目して「仕事の変化」について整理した(表2-4)。

表2-4 仕事の変化

退職	21
仕事あり	18
子によって退職+仕事	3
不明	3

表2-4で整理したように、「退職」が21例で最も多く、次いで「仕事あり」が18例、「子によって、退職した場合と仕事をしていた時期の両方がある」のが3例、「不明(仕事は有しているが、詳細が不明)」が3例あった。

「仕事あり」の18例のうち、「産休・育休を利用

した」のが6例で、制度を利用したかは不明だが産前産後に休みをとったのが7例、「仕事の量を減らした・休み休み仕事をした」のが3例、「変化なし」が2例だった。

2) 職場からの配慮

本節においても、前節に引き続いて女性に着目して、職場からの配慮について整理をしていく。なお、前節で整理したように妊娠中に退職しているケースもあるが、妊娠してから出産までの期間で途中まで働いていた際の語りを含めて整理をしている。

「あり」は27例で最も多い。その職種は、保育士が6例、看護師が2例、公務員が3例（自衛官1、教員1、保健師1）、介護職・ケアマネが2例、農業が3例、その他が11例であった。主に、重労働や重いものを持ってくれたり、夜勤や仕事の量を減らしたり、具合が悪い時などに休みをもらえたというものだった。

「リーダーから主任に夜勤をいれないでくれと言ってくれた。入浴介助もだんだん免除してくれた」(No.1：介護職)

「1人目の時に周りが重いものを持たせないようにしてくれ、座って仕事をさせてくれた。体調がすぐれない時には周りから『何かあったら大変だから帰るなさい』と言ってもらっていた。2人目の時は休みも取れて、人数の少ないクラスの担当という配慮がされていた」(No.14：保育士)

「夜勤が免除。患者さんの移動などの重労働も免除。5時に帰宅してもいいと言われたこともある。育休・産休は使っていない」(No.7：看護師)

「具合が悪かったらお休みにさせてもらったり、結構してもらった」(No.17：保育士)

「時間や金銭面の工夫もしてくれた。夫と私の給料を上げてくれた（中略）1歳まで休んでいいよとお母さんが言ってくれた。」(No.42：農業)

「子どもの見守りを祖母がしてくれる、近いか

ら頼れる。農作業とかで先に上がらせてくれたり、妊娠時に体調を気遣ってくれた」(No.43：農業)

次いで、「なし」は15例であった。そのうち、妊娠時に退職をして仕事をしていないのが7例だった。その他の8例は、「休みを取りづらかった」という回答が多く、制度面でも保障されていないことで、体調が悪くなって仕事が続けられず、途中でやめているケースがあった。

「妊娠している人には厳しい環境。別の人が産休で、これ以上そういう人が出るのは困るという状態だった。上司に相談したが、ダメだった」(No.4)

「前の職場では育休が無かった。産休は2ヶ月あるが、2ヶ月もあたらなかった。出産前もともにあたらなかった」(No.34)

職場からの配慮が「あった」ケースでは、ケア労働に従事しているものや公務員、農業や自営業の人が占めていた。特に、保育士や職場の中に子どもを育てた経験がある人がいた場合には、職場でも配慮が得られているという特徴があった。その一方で、看護師として働いている場合には、なかなか休みが取れないというケースも見られた。

(5) 育児・家事の分担とサポート

ここでは、妊娠・出産期にどのように家事や育児を行っていたのか、その際、誰からどのようなサポートを受けていたのかについて結果を示していく。

1) 育児・家事の分担

ここでは、妊娠・出産の時期における育児・家事の分担について論じていく。

表 2-5 育児・家事の分担

妻	32
基本的に妻+時々夫が協力	10
分担制	3

表2-5で整理したように、「妻」が32例、「基本的に妻で、時々夫が協力」してくれるケースが10例、「分担制」が3例だった。「基本的に妻で、時々夫が協力」してくれるケースを含めると、妊娠・出産期においては、育児・家事は基本的に妻が行っているケースが約9割を占めていた。

第1に、「すべて妻」が行っていたケースでは、専業主婦であったり、仕事をしている夫には言いづらいという特徴や、仕事で夫はほとんど家にいないという特徴があった。

「夫はノータッチ。どうしていいかわからなくて、面倒くさくなるようだ」(No.1)

「家事は全て私。妊娠・出産の時も私。ギリギリ臨月まで仕事もして、家事をやっていた。出産して、日が明ける(21日間)までは、夫のお母さんがやってくれた。それからは全部私。夫に言えば、やってくれるかもしれないが、言いづらい。夫は仕事をしているから」(No.40)

「家事は基本的にすべて私。緊急の場合は祖母や長女などがする。夫は仕事やボランティアでほとんど家にいない。(私は)仕事は21日の床上げの時だけ休んで、それ以外は働いていた(中略)(工夫)他の母親は夫に分担してやってもらっているらしいが、やっていると頼んでやってもらえないのは嫌だから、自分でやることにしている」(No.28)

「1歳までは専業主婦で子どもをみていた。家での役割は全て自分」(No.43)

「全部私。家事はたまっている。茶碗とか3日に1回洗っている感じ。親は手伝ってくれたけど、夫は夜中に帰ってくるので夫のサポートは無し」(No.13)

第2に、「夫が協力的」というケースでは、妻の体調が悪い時や妻が大変な時に夫が積極的に家事をしたり、手伝うという特徴が見られた。

「つわりの時期は夫がやる、家事はできる方がやっていた」(夫が回答者：No12)

「期限付きで産休なし。やるか、やめるか。家事は夫が手伝ってくれた。やってと言えば(やってくれた)。もしくは、時々自分で(夫自身が)やってくれる」(No.5)

「掃除・洗濯は夫が気づいた時に産む前からしていたので、それは変化なし。妻が不規則な生活をしているので、夜遅くに帰ってきた時など疲れているなど感じた時は夫が積極的に家事をする」(夫が回答者：No.36)

第3に、「分担制」というケースでは、夫が洗濯やお風呂洗いを行っているという特徴があった。例えば、以下のような内容である。

「元々分担制。お風呂洗い・お風呂に入れるのは夫の仕事。いっぱいいっぱいの時は夫も手伝うし、後回しになっても文句を言われない」(No.6)

「洗濯は夫。それ以外は妻」(No.7)

以上のように、基本的に家事や育児などは妻の役割として定着しているという特徴が見られた。妊娠・出産の時期であっても、女性が中心的に家事をしていた。その背景には、「仕事をしている夫には頼みづらい」という状況や何かあった時には実家の母によるサポートが得られていたことと関係していた。特に、家族内での家事分担は労働市場における時間配分によって規定されているという特徴がみられた。妊娠・出産時期の女性は働いていても、パートなどで家事や子育てができるような働き方をしていた。前節で整理したように、妊娠・出産時期において、女性は退職をしたり、仕事の量を減らしており、女性のほうが男性よりも家で過ごす時間が長くなっていた。妊娠・出産の時期において、働き方に変化が見られた女性たちとは対照的に、男性の働き方には変化が無かった。このように、仕事の変化や働き方によって、家庭内外で過ごす時間の配分が決まっており、このことが家族内での役割分担にも関わっていると推察できる。また、当該地域では、女性はケア労

働に就くケースが多いという状況も含めて、男女の就く仕事の傾向が異っていた。これらのことを勘案すると、家庭での役割分担は労働市場における時間の配分によって規定されるという側面があると考えられる。

一方で、性別役割分業意識が強いために、女性が育児や家事などの家庭での役割を中心的に引き受け、女性が育児や家事を行うことを念頭に置いて働き方を選択しているという状況も見られた。

2) サポート

ここでは、妊娠・出産の時期において、誰からどのようなサポートがあったのかについて述べていく（表 2-6）。

表 2-6 サポートの有無

	あり	なし	あった時と 無い時がある	不明
家族	40	4	1	0
友人	23	19	2	1
近所	8	30	0	7

(i) 生育家族からのサポート

表 2-6 を見ると、家族からのサポートは約 9 割の人が「あり」と答えている。そのうち、妻の実家からのサポートが 21 例、夫婦両方の実家からサポートがあったケースが 14 例、夫の実家からのサポートのみが 5 例あった。

まず、妻の実家からサポートがあったケースの特徴について整理をする。妻の実家からのサポートの内容は、①実母による家事や育児の手伝いなどの具体的なサポート、②子どもの服を購入してくれる・おさがりをくれる、③金銭的なサポート、④「何かあればお願いします」などの生活全般に対するサポートが大半を占めていた。

次に、「実家・実母」ではなく、「夫の実家、とくに夫の母（義母）」からサポートが得られたケースについても簡単にまとめる。夫の実家・夫の母が床上げ 21 日まで、家事の手伝いをしてくれたり、「作った料理を分けてくれる」、「育児のサポート」、夫の実家からは金銭的な援助のみがサポート

の内容として挙げられていた。

次に、家族からのサポートが「なし」の 4 例について簡単に触れる。親族からのサポートがないと答えたケースには、①親族が遠方に住んでいるケース、②家族の状況でサポートできないケース、③サポートは無かったが、電話で連絡を取っているケースの 3 つの特徴があった。

「（サポートは）特になく、B市とか遠くにいるので。（1人目の時はB市に里帰り出産）」（No.29）

「自分の母親が元気だと協力してもらえるが、言語障害と記憶力が曖昧で家族と話すのがやっとだった。（このように）実母は病気の後遺症が残っていたので、夫と2人で乗り切ろうと決意していた。実父は協力的」（No.31）

「私の実家の方は母が他界し、父親しかいないし、姉は結婚していないから参考にならない。主人の方は授乳ができなかったので、全然顔を出していない。敏感な時期に義母から聞かれると、プレッシャーになってしまう。敏感じゃなければ流せるけど、そうじゃないとアーってになってしまう。夫は変にあーだこうだと言わないし、サポートもしてくれる。家事できなくてもいわないし、励ましてくれる。」（No.38、夫婦ともにA市定住型）

「きょうだいA市に住んでおり、子どもがいるので相談はしたが、援助は特になかった。電話で身内から情報を聞いていただけ」（No.11、実母と同居）

「あった時と無い時がある」1例については、以下のとおりである。

「1人目の時はない。2人目の時はパートナーの母がマメに通ってくれた。1人目を実家に預けて、サポートがあった」（No.4）

特に、家族からのサポートが無かったケースでは、3つの特徴があった。

第1に、女性自身が保育士や看護師などで知識があり、夫妻ともに職場からの配慮があったという特徴がある。特に、妻だけではなく、夫が自衛官や理学療法士などで職場からの理解があり、夫が休みをとったケースがあった。

「夫は職場に伝えて、産後一週間休み、付き添ってくれた。切迫早産で入院しており、手術の場合も休ませてもらえた。夫の職場がとても理解があり、夫の理解もあった。」(No.31)

「妻は育休をとった。上の子の時は1年より少ない、2番目の子は9カ月、下の子は2ヶ月くらい／(職場の配慮) 2ヶ月から1歳になるまで、保育所の送迎のため、時短で30分くらい早く帰してもらった。熱を出した時には、2人ともお休みをいただけます。職場に子どもを連れて行ったら、スタッフが面倒を見てくれる。」(No.29)

第2に、友人などから育児に関する話を聞いているという特徴が見られた。

「親族から聞くよりも同じ育児をしている人に話を聞く方がよい」(No.38、夫婦ともにA市定住型)

「色々な人の出産したときの話を聞いていた。(私は)心配するようなタイプではなく、なるようになるかなと…」(No.11、実母と同居)

このように、家族からのサポートがなくても、夫妻ともに職場からの配慮や友人からのサポートがあることで、妊娠・出産期の生活を成り立たせていた。また、親族からのサポートが無いと言っても、実母と同居しているケースやA市内に家族がいるケースもあり、妊娠・出産期に具体的なサポートが無かったということだったが、何かあれば助けてもらえるという状況はあった。

(ii) 友人からのサポート

表2-6で整理したように、「友人からサポートがあった」ケースは23例、「なし」は19例、「あつ

た時と無い時があった」ケースは2例、「不明」が1例あった。

「友人からのサポートがあった」ケースでは、主に4つのサポートがあった。第1に、愚痴や相談に乗ってくれる、情報交換をしている。第2に、自分で子どもの面倒を見られない時に、子どもの世話をしてくれる、子ども同士の交流、第3に、出産のお祝い、第4に、服やおもちゃなどをプレゼントしてくれる、おさがりをくれる。

「夫の職場の子と仲良くなって愚痴をちょくちょく聞いてくれて。妊娠中は不安定になりやすいのに、夫は飲みに出かけて物に当たるしか出来ないけど、それじゃおさまらない。なんで私ばかり、こんなに我慢しなきゃいけないんだろうと。私が気晴らしできるように(夫に)子どもを見ているように(友人から)夫に言ってくれた」(No.1)

「友人が先に子どもを産んでいたから、服やベビーベッドなどおさがりをくれた」(No.30)

「就職してからの友人、よさこいのメンバー、一緒に仕事をしてきた人、ママ友、同じくらいの年の娘がいるお父さんに子どもを見てもらっている。お互いさまでやってくれる人たちがいる」(No.32)

次に、「友人からのサポートがあった時と無い時があった」ケースは、以下のようなものであった。

「1人目の時は、つわりがひどい時は友人に病院に連れて行ってもらったりした。2人目の時は特に周りからの援助は無かった」(No.14)

「あまり周りの友人が結婚・出産している人が少なくて、あまりそういう話ができなかった。今(二人目)は同じように自衛官の夫がいる友人とお互いに、見てあげるよーとか、預かるよーと」(No.26)

「友人からのサポートなし」は19例であった。そのうち、18例は「親族からのサポート」があつ

た。残りの「1例」は、家族や友人、近所からのサポートが無い一方で、夫婦ともに職場からの配慮を得ていた。例えば、子どもが熱を出した時に休みをもらえたり、職場に子どもを連れて行くと他の職員に見てもらえるという状況があった。

以上のように、友人からのサポートは、情報交換や愚痴を言ったり、相談しあうという日常的なものから、面倒を見られない時に、子どもの世話を代わりにしてくれたり、子どもの服のおさがりをもらうという具体的なものであった。一方で、友人からのサポートが無いケースでは、「1例」を除いて、親族からのサポートがあった。親族や友人からのサポートが無いケースでは、夫婦ともに職場からの配慮を得られており、誰からもサポートがないという状況は見られなかった。

(iii) 近所からのサポート

表2-6で整理したように、近所から「サポートがあった」ケースは、8例だった。主に、子どもを見てくれたり、「子どもを産む時に雪かきをしてくれた」という語りや声かけをしてくれたり、野菜などの食べ物をくれるという特徴があった。

「近所はおばあちゃんが多い、世間話的なことはする。うちで取ったから食べてとか、子どもにお菓子をくれる」(No.13)

「近所の人は何人かから出産祝いをいただいたくらいかな」(No.20)

「近所の人に帰る途中で(子どもを)見てもらう、預けることがある。近所づきあいの中でやっている」(No.42)

以上のように、近所からのサポートはほとんど無かった。しかし、「家族」「友人」「近所」「職場」のどれからも、サポートや配慮が無いという状況は見られなかった。1例は「家族」「友人」「近所」からのサポートを得られていなかったが、前節で整理したように、夫妻ともに職場からの配慮があった。

(6) 市への要望(A市で過ごすことで感じた良さと改善してほしいところ)

ここでは、A市で妊娠・出産期を過ごすことで感じた良さと改善点について45例の回答を整理していく。その際、A市での妊娠・出産の経験から語っているものや他の町での妊娠・出産の経験を語っているものが含まれている。

1) A市で妊娠・出産することの良さ

A市で妊娠・出産する「良さ」としては主に、①実家や自宅の近くで産めること、②病院が1ヶ所ですべてできてよい、同じ医師にずっと見てもらえること、③病院が24時間、緊急時に対応してくれる、NICUも完備していること、④病院にかかる費用が安いこと、⑤自然の豊かさの5つがあげられる。

「病院は自宅から近かったので。自分で出産方法を選べたりしたので良かった」(No.10)

「免除。妊娠した時に、診察の時にもらった紙を毎日持っていけば、免除にしてくれた。これは良かった」(No.43)

「良い面は費用が安いこと。病院の内装は2人目の時は改装されたが、1人目を出産した当時は汚いなと思った」(No.34)

「産婦人科探しなどで苦労することが無かった」(No.2)

「小児科など市立病院、医療機関が充実していて満足。夜間対応もしてくれて安心」(No.45)

「選ぶところがないというのは悪くもあり、良くもある。悩まないで済む。C市では迷って。電話しても入れなかったり。A市はみんな同じところで産んだ。みんな同じところという安心感。小児科も同じところ。生んだ時も同じ先生がいるという安心感。(病院の比較) その病院、病院によって違うのかなというのがある。C市では(値段が)高い所に行けばいいものが返ってくるとか、ごはんがおいしいとか。私は安い所が良かったので、どちらもA市の総合病院」(No.41)

「産んだ後、産婦人科のトイレが洋式になっ

た。制度的な面では、第1子（3回目までは無料）のときと第2子（無料の回数が増えた）の時までは保障してくれる金額が変わって健診で大きなお金が出て行くのがなくなった。」(No.1)

「A市市立病院の産婦人科が新しくなった。B市の個人病院は良いじゃないですか。昼とかで生めるらしくて。でも、(A市)市立病院も分娩室と陣痛室が一緒になってよかったと思う。小児科も24時間医師がいるので。食事も普通だと思います。ここ(A市市立病院)しかないしなーという感じです」(No.33)

「どこの買い物に行くにしても、利便性がある。車通りが少ないので、ベビーカーで安心してける。公園もあるし、散歩もできる」(No.32)

2) A市で妊娠・出産の時期を過ごす際に感じたマイナス面・改善点

ここでは、A市で妊娠・出産の時期を過ごすことで感じたマイナス面・改善点について整理していく。主に、①市内には1ヶ所しかなく、病院の選択肢が少ないこと、②母子同室や個室が無い・エコアの性能が低い等の病院の設備の不十分さと面会の制限や出産方法が限定的、③病院の待ち時間が長く、預け先がない、④市外の病院を受診した際の費用が高い、⑤入院中の母親同士の交流がとりづらくなったこと、⑥市の対応のわかりづらさ・子どもにもオムツ支給をして欲しい、⑦助産師の対応などの7つのことがあげられる。例えば、以下のような内容である。

「A市は病院が少ない。市立病院は予約制でちょっと行きづらい。待ち時間がある」(No.10)

「病院の選択肢が少ない。(中略)近くに個人の産院があれば選べる、そこに行くかは別だけど。人口を考えるとどうかと思うけど、病院はあってほしい。もっと良くなってほしい」(No.32)

「今ここがダメなら、次はどこの病院と決まっ

ていた。そこの病院で産みたいという人なら困るなと思った」(No.4)

「3番目をA市の市立病院で出産した際に、産んだ子どもを第1子と第2子が見に来て、見せてもらえないことが残念だった。一緒に見て欲しかったし、(子どもも)見られなくて可哀想だった。別室に管理されていて、母親でもなかなか会えなかった。2番目を生んだ時もすでにそういうことが厳しくなりつつあった」(No.44)

「A市もB市もおおざっぱ。助産師とかは親密になれない。それは忙しさの中からだとは思いますが。B市では個室であったが、(看護師を)よんでもなかなか来なかった。下の子の時は、A市で、病院には母子同室・個室が無かった。ちょっと狭く感じた」(No.42)

「A市の病院に通っていたら、免除はあるけど、私はB市に通っていたから使っていないけどB市は設備が整っていて、個室だったので、自分のリズムと赤ちゃんのリズムで過ごせた。A市の制度とかあまり詳しくないけど、B市も無料だったら良かったのに。第1子の時は回数券を配布されて使うと支払う金額が変わるし、通うのにお金が結構かかった。B市は診察は番号で呼ばれるため、プライバシーは守られ、待ち時間もないが、A市は待たされると聞く。予約制なのに」(No.30)

「A市は病院が1つしかないから待ち時間が長い。予約しても、1時間待つことがある。体調が悪い時、椅子が直角なので大変。耐えられなくて中で休ませてもらったこともある」(No.14)

「市立病院の待ち時間が長い。長い時だと1時間くらい待つ、妊娠中でつわりの時などは大変」(No.3)

「B市に通院したが、健診は無料でよかった。戻ってくるお金が少ない。オムツが高い。(高齢者だけではなく、)子どもにも配布してほしい」(No.5)

「1人目を産んで、働くから保育所にいれたく

て、よく分からなくて、市役所に聞きに行ったら、基本自子どもは親が育てるものですからって若い人に言われた。2、3人目ならわかるけど、1人目で子育てがよく分からない時に言われたから、保育所に入れちゃいけないのかと思った。向こうからしたらそれが仕事なので、向こうは何回言っても、こちらは初めてなので不親切」(No.9)

「カンガルーケアをしていた時に、急に子どもを持って行かれて、呼吸・気管に問題があると言われて保育器へ入れられた。助産師が悪かったらしくて。(中略)この時は心配だった。でも、他の人が親切だったから不満はない。(中略)制度とかでもっとこうして欲しかったということはない。自分でできることをするだけ。(No.43)

「1人目の時に市立病院の助産師さんに、何でも母乳育児と言われ、嫌がる子どもを抑えつけて…無理やり抑えつけて、それがつらかった、嫌だった」(No.34)

なお、調査時点では実施されていなかったが、その後、制度が変更になり、未就学の子どもを対象として、乳幼児等医療費の全額助成、小学生の入院費全額助成が始まった。

3. 現在の生活—保育所の役割とサポート

ここでは、保育所を利用している現在の生活に着目し、どのように仕事や家事、育児などの生活を営んでいるのかについて論じていく。その際、保育所がどのような役割を果たしているのかについて整理する。特に、「保育所の利用時間」「保育所の送り迎え」「保育料」「家事・育児の分担」「出張や残業」「世話ができない時のケアの担い手とサポート」「予防接種・病気・けが」「時間」「保育所の良い点と改善点」「子育てのしやすさ」「要望」の11項目について論じる。

ここで、調査結果の整理を始める前に、なぜ、この11項目について論じていくのかについて簡単に説明しておく。この11項目は大きく分けて、4つの意味・理由をもっている。

第1に、その地域の社会資源や制度が子育て生活にどのように影響しているのかを把握するためである。特に、保育所がどのような役割を果たしているのか、A市の保育サービスや医療機関など地域の資源が子育て生活にどのような影響を与えているのかを考える。そのために、「保育所の利用時間」「予防接種・病気・けが」「時間」「保育所の良い点と改善点」「子育てのしやすさ」「要望」の項目を整理していく。「市への要望」や「子育てのしやすさ」に関する回答から、この町で子育てをすることの良さやしづらさ・改善点、市のサービスや資源の制約について論じる。

第2に、本人がもつインフォーマルな社会資源・社会関係が子育て生活とどのように関係しているのかを把握するためである。特に、世話が出来ない時には誰に子どもの世話をお願いするのか、実家や友人などからサポートを得ているのか／得られていない場合には、どのように行っているのかなどを把握するためである。そのために、「世話ができない時のケアの担い手とサポート」の項目を扱う。

第3に、保育所を利用しながら、仕事や家事、育児をどのように行っているのかを理解するためである。これは、個人の意識や行動が子育て生活とどのように関わっているかを把握することにもつながる。そのために、「保育所の送り迎え」「家事・育児の分担」「出張や残業」「時間」の項目を取り上げる。

第4に、調査協力者の属性・位置を把握するためである。今回の3歳児を持つ子育て世帯の調査協力者が全体の利用者のどのくらいの層に位置しているのか、保育所を利用することが生活にどのような影響を与えているのかを確認するために、「保育料」の項目を設けている。

以上のことから、働きながら子育てを行う際に、①保育所や医療機関など地域の資源が子育て生活にどのような影響を与えているのか、保育制度が現実的に果たす役割やこの地域で子育てをする際にどのようなところがしやすい／にくいのか、②誰からどのようなサポートを受けているのか／

受けていない場合にはどのようにしているのか、
③実際に仕事や子育て、家事をどのように行っているのかを検討していくために、上記の 11 項目について本章で整理していく。

(1) 保育所の利用時間

本節では、実際に保育所をどのように利用しているのか、保育所の利用時間について 45 例を整理した(表 3-1)。回答が得られず、利用状況が不明なものは「不明」として記載している。

表 3-1 保育所の利用

平日のみ・延長なし	11
平日のみ・延長あり	3
土曜日も利用・延長なし	11
土曜日も利用・延長あり	13
延長あり・土曜日の利用が不明	1
延長なし・土曜日の利用が不明	4
不明	2

表 3-1 で示したように、「土曜日も利用し、延長あり」が 13 例で最も多かった。職種別にみると、妻の仕事は、「介護士・福祉関係」が 3 例、「看護師」が 4 例、「保育士」が 1 例、「自衛官」が 1 例、「自営業」が 2 例、「保険外交員」が 1 例、「パート(職種不明)」が 1 例だった。一方で、夫の仕事は、「自衛官」が 3 例、「消防士」が 1 例、「理学療法士」が 1 例、「動物病院」が 1 例、「自営業」が 2 例、「会社員」が 3 例、「削蹄師」が 1 例、「離別で不明」が 1 例だった。このように、妻はケア労働に就いている人が 8 例で多かった。土曜日も仕事があり、平日は残業や勉強会などがある際には延長保育を利用しているケースが多かった。

「勤務時間が不規則でバラバラ。朝 7 時から来ているときもあるし、夜 7 時の延長が終わるまで。早いとき(早く迎えに行く時)は昼頃。土曜日も利用している」(No.4)

「8 時から 17 時 30 分ごろまで。土曜日に仕事がある時は利用し、延長(保育)もたまに残業がある時に利用している」(No.29)

「7 時半から 17 時 15 分には、迎えに来ている。土曜日仕事のために利用し、延長(保育)もたまに利用している。いろんな勉強会があり、そういう時は 19 時まで」(No.30)

次いで「平日のみの利用で延長なし」が 11 例だった。職種別に見ると、妻の仕事は「福祉関係」が 1 例、「農業(手伝い)」が 1 例、「市役所(嘱託)」が 1 例、「保育士」が 2 例、「自営業」が 1 例、「スーパーや薬局などでアルバイト・パート」が 3 例、「販売員」が 1 例、「農協(臨時職員)」が 1 例だった。夫の仕事は、「農業」が 1 例、「農協整備士」が 1 例、「衛生施設事務組合」が 2 例、「自衛官」が 3 例、「自営業」が 2 例、「会社員」が 1 例、「離別で不明」が 1 例だった。自営業で勤務時間を調整できたケースや保育所利用時間を軸にして仕事や家事の時間を決めている場合、妻がアルバイトやパートで夕方までには勤務が終わる場合や夫の仕事が延長保育を利用しなくても間に合う場合、妻が仕事の場合は、祖父母や夫が送迎をしているという特徴があった。

「月曜日から金曜日は 9 時から 17 時まで利用。これを基本にして、家事や仕事の時間を組み立てる」(No.3)

「8 時半から 16 時頃まで預ける。平日のみで延長なし。仕事は 14 時までなので、家事をして迎えに行く」(No.10)

「早い時は 7 時半から 16 時 15 分、遅い時は 10 時 15 分から 19 時まで。仕事の間見てもらっている。延長保育・土曜日は使っていない。月に 1 回土曜日に仕事がある時は夫が見てくれる」(No.32)

「朝 9 時から 15 時—17 時。仕事が遅い時は 17 時までとか、早かったらお昼とか。休日・延長は利用無し」(No.26)

同様に、「土曜日も利用・延長なし」が 11 例で 2 番目に多かった。職種別に見ると、妻の仕事は「農業」が 4 例、「看護師」が 1 例、「保育士」が 1

例、「介護士・福祉関係」が2例、「飲食店（自営とパート）」が1例、「ホテル従業員」が1例、「醸造店（パート）」が1例だった。夫の仕事は、「農業」が4例、「花屋」が1例、「飲食店」が1例、「自営業」が1例、「会社員（葬儀関係）」が1例、「学校技師（期限付き）」が1例、「職種が不明」が1例、「離別で不明」が1例だった。平日は延長保育を利用しなくても、仕事を終えてから迎えにいける場合や妻が行けない時に夫が迎えに行き、土曜日はどのケースも仕事があるために利用していた。

「早くて7時30分から18時、土曜日は仕事のときに利用している。延長保育は頼んだが、1回も利用していない」（No.16）

「9時前頃から17時半。仕事の時は土曜日でも利用し、延長はなし。幼稚園は月から金で預けられて、土曜日も預けるなら、保育所のほうに。それも仕事の時のみとなっている。」（No.33）

「保育所所属だから8時から16時か17時まで使っている。18時の時もある。土曜日でも仕事をしている。（中略）保育所の方が働いている人にとっては便利。幼稚園だと基本、午前中は預けられるが、昼以降はその分お金がとられる」（No.40）

それらに次いで、「延長なし・土曜日の利用が不明」が4例である。職種別に見ると、妻の仕事は「保健師」が1例、「派遣（農作業）」が1例、「自営業」が1例、「パート（福祉施設の清掃員）」が1例だった。夫の仕事は「市役所」が1例、「自営業」が1例、「食品製造業」が1例、「離別で不明」が1例だった。平日は延長をしなくても、仕事終わりに迎えに行っているケースがあった。

「7時半前には預け、17時に仕事が終わるので、17時半にお迎えに。延長なし」（No.18）

「8時半から13時半。遅くても16時。延長保育なし。／12時には勤務終了。帰宅後、家事。13時半迎え」（No.44）

それらに次いで、「平日のみの利用で延長あり」が3例である。職業別に見ると、妻の仕事は「教員」が1例、「会社員（支店長）」が1例、「事務（正職員）」が1例である。夫の仕事は、3例すべてが「自衛官」だった。例えば、以下のような内容である。

「7時45分から17時50分頃まで。土曜日は利用しない。延長は月に2回ぐらい、仕事のときに利用している。／子ども中心で、なるべく定時に帰るようにしている。職場の人の理解もある」（No.5）

「8時以降から17時半頃。17時過ぎに迎えに行く。私が迎えに行く時は延長して、19時ぎりぎりになる。土曜日は利用しない。出張で私が不在な時でも（私の）母がいるし、夫も週末に帰ってくる」（No.22）

さらに、「延長ありで、土曜日の利用の有無が不明」が1例ある。職業別に見ると、妻の職業は「パート（カラオケ店）」が1例、夫の仕事は「飲食店」が1例である。

「9時から17時頃まで。お盆や正月、ゴールデンウィークなど忙しい時は19時まで延長する」（No.13）

最後に、利用時間がわからなかった「不明」は2例あった。職業別に見ると、妻の仕事は「保育士」が1例、「医療事務（パート）」が1例であり、夫の仕事は「自衛官」が1例、「アパレルの店長」が1例だった。詳しい利用状況がわからなかった1例では、以下のような内容であった。

「8時半から（迎えに行くのは）バラバラ。仕事に応じて、長女の送り迎えによって（変わる）」（No.25）

このように、「不明」である2例を除くと、「月曜日から土曜日まで利用している」のが24例、「平

日のみ利用」は14例であり、土曜日も利用している人が多いことがわかる。

特に、子どもを中心に生活を組み立てているケースと仕事の勤務時間が不規則であるために、保育所の利用時間が日によってばらつきが出ている傾向がみられた。

(2) 保育所の送り迎え

ここでは、保育所の送り迎えを誰が行っているのかについて、回答が得られた45例すべてを整理した(表3-2)。

表3-2 保育所の送り迎え

主に妻が送迎	33
主に夫が送迎	3
主に妻の母が送迎	1
交互・分担	7
朝は妻、迎えは夫か妻の父	1

表3-2の通り、「主に妻が送迎」しているケースが33例で最も多かった。その33例のうち、「たまに一緒」に行くケースが2例だった。妻が行けない場合などは、「夫やパートナー」が行くケースが14例、「(生育)家族」が8例、「職場の人」が1例だった。(生育)家族については、妻のほうに6例、夫のほうに1例、親族の誰かと答えているのが1例あった。このグループの特徴は、3つあった。第1に、時間的に制約が無くても、夫が行かないケース、第2に、仕事の時間を考慮すると、妻のほうに送迎できるケース、第3に、基本的には妻が中心的な役割を果たしているが、子どもの要望や休みの場合などは夫も協力してくれるという場合があった。

「時間的に都合は悪くないけど、夫はしない」(No.2)

「ほとんど私。夫ができないわけではないが、私は自営でどうにでもできるため」(No.9)

「休みの時は夫もたまに送迎してくれる。迎えはなぜか、「一緒に行くか」と夫に言われて2人で行くこともある」(No.20)

「子どもが夫のことを好きだから休みであれば、夫が送迎する時もある」(No.26)

次いで、「交互・分担」が7例だった。例えば、以下のような内容である。

「朝は私。夫は7時前に出勤。迎えは交代で、(妻が)仕事で遅くなる時は夫」(No.8)

「夫婦で交代交代で。夫は夜勤も有り」(No.34)

「朝は私。迎えは夫。夫の仕事は17時半まで。夫の方が早ければ、夫が迎えに行く」(No.32)

さらに、主に夫が送迎をしているケースは3例あった。そのうち、夫が回答したケースが2例含まれている。保健師の1例を除いて、妻が看護師として働いているケースが2例あった。

「夫。お店が9時—19時なので、仕事の合間にちょっと来てという風に。私は日勤だと17時までとなっているが、17時きっかりには終わらないので」(No.33)

「妻は早く出る必要があるため」(No.36)

また、「朝は妻、迎えは夫か妻の父」は1例あった。例えば、以下のような内容である。

「送りは私、迎えに行くのは祖父、たまに夫。遅くまで預けるのはかわいそうだと思っているので、退職している祖父に迎えに行ってもらっている。(私が)早番の時は祖父に送ってもらう」(No.31)

最後に、「妻の母」がしているケースが1例あった。福祉関係の仕事をしており、ひとり親世帯であるため、本人の勤務時間によって送迎ができる時とできない時がある。そのため、祖母(妻の母)が主に送迎を行っていた。

(3) 保育料

子どもが複数いる場合の回答が多いため、留意

する必要もあるが、ここでは、1ヶ月当たりの保育料がいくらかかっているのかについて整理をしていく。

45例を整理していくと、「保育料0円」が3例、「1万円以下」が1例、「1万円以上2万円未満」が6例、「2万円以上4万円未満」が11例、「4万円以上6万円未満」が14例、「6万円以上8万円未満」が10例だった。保育料の負担感については、「前に支払っていた金額よりは安くなったから、今は負担感なし」というケースもあったが、ほとんどのケースで「高い」「負担に感じる」という意見があった。しかし、保育料が高いという回答の中には、「もっと支払っている人もいるから安い方」(No.22等)「仕方ない」(No.9、28等)「こんなものかな」(No.3、6等)「前よりは安くなったからマシ」(No.19)という内容が大半を占めていた。また、「もう少し安かったらいいな。でも日中見てもらって、給食も出してもらって、保育園の先生方の苦労を考えると…」(No.26)という事例もあった。

このようなことから、「保育料は高い」と感じながらも、仕方ないという気持ちであることが推察できる。その一方で、「昨年よりも金額が高くなった」(No.21)「何のために働いているのかわからない時がある」(No.2)「保育料のために働いているような感じ」(No.12)という事例も見られた。

(4) 家事・育児の分担

ここでは、45例の現在の生活に焦点をあて、家事や育児をどのように行っているのかについて整理していく。その際、妊娠・出産期や保育所利用開始時の家事や育児の分担についても簡単に触れておく(表3-3)。

表3-3で整理したように、家事・育児を行っているのは「すべて妻」が17例で最も多かった。共通するのは、妊娠・出産の時期から現在に至るまで、女性が中心的な役割を果たしていることである。

「実家に行っているときは、(妻の)母・妹がしてくれる。家にいるときは私」(No.4)

表3-3 家事・育児の分担

	妊娠・ 出産期	保育所 利用開始時	現在
すべて妻	32	25	17
基本的に妻+時々夫が協力	10	13	15
分担制	3	3	5
時々夫が育児を協力、 それ以外は妻		4	8

「他の母親は分担しているらしいが、夫にやっていると頼んでやってもらえないのは嫌だから、自分でやる。自分が辛い時、限界の時は手を抜く。ご飯を外で買うと高いから、なるべく自分で作る。自分が調子悪い時は娘が兄(娘の兄、本人の息子)のご飯を作ってくれる。子どもたちがやってくれる」(No.28)

「基本1人でやっている。大変だけど、自分でできることは自分でしたい(中略)夫はやってと言ったら、やってくれる。男は仕事、女は家事というタイプではなく、むしろ働いてくれてタイプ(中略)朝は時間がないから、茶碗洗いなどの家事はしない」(No.43)

次いで、「基本的に妻+時々夫が協力」が15例で多かった。その特徴は、①妻が疲れている時に手伝ったり、「言えばやってくれる」、②ごみ捨てや食器洗い、お風呂掃除などを手伝う、③子どもが生まれてから手伝ってくれるようになったという3つである。

一方で、子どもが大きくなるにつれて手伝いが減った場合や試行錯誤している場合もあった。なかには、自分がやらなければいけない、女性が家事や育児の責任・役割を担ってやらなければいけないという意識が見られた。

「洗濯は夫、それ以外は私」(No.7)

「私がほとんどしている。夫の帰宅が早い時に皿洗いとか、(私が)出来ないとき、体調が悪いときは少し手伝い。働き始めはちょっと不満もあったが、最近は思わなくなってきた。不満を

言えば、やってくれる。けんかになったこともある。分担は9:1で私。赤ちゃんの時は3くらいはやってくれたんですけど、大きくなると減ってきた。小さい頃はちょっと負担に思う。もう少しやってほしいなと思っていた。最近は思わなくなってきた。大変さの愚痴は、職場の先生や友人に話せる人が増えたので、同じようにわかってくれる人がいるので、気持ち的に楽になったのかもしれない」(No.8)

「たまにゴミ捨て、食器洗いを夫がしてくれる」(No.10)

「(妻が) 食事・掃除・洗濯、家事全般。夫は休日子どもを連れてB市に遊びに行き、子どもを見ている。ゴミ捨て、皿洗い、妻が寝落ちした時に洗濯」(No.14)

「決まりはもともと無かったけど、もとはすべて私(妻) がやるという感じで決まりになるけど、洗濯・食器も言ったらしてくれる。子どもが生まれてから、やってくれるようになった」(No.33)

「試行錯誤中。洗濯物をやってもらおうとした時もあったが、女の子の服のヒラヒラを伸ばさずに干すし、掃除・片づけは夫がやっているが、端の方にまとめて、見た目は綺麗というやり方…(中略) 前まではやってくれないことでイライラしていたが、言えば、やってくれるので、イライラする前に言うようにしている。子どもの世話はよくしてくれる。ご飯も一緒に食べてくれるし、着替えもしてくれる。お風呂は子どもたちの気分でどちらと入るか決める。手を抜いても怒らない人だし、理解してくれる。(中略) 自分の中でかつちりしなきゃというのがなければ良いのだが…母が主婦で父が亭主関白だったので、やらなきゃいけないという思いが強い」(No.19)

「夫は職場で子育てを理由に休みを取っているかもしれないけど、家にいるからといって、娘に昼も食べさせてくれない。夫が休みの日に子どもを結構外に出してくれる。自分(夫) がバイクを磨く時、子どももついていく。でも、

(私に) その間に掃除機をかけておけよとか言う。自分の中では、家事・育児は、自分: 夫= 8:2くらい。でも、夫は自分のことを第1に考えているから…俺はやっていると考えているから、カチンとくる」(No.20)

それらに次いで、「時々夫が育児を協力、それ以外は妻」は8例あった。例えば、以下のような内容があった。

「食事・掃除は私。2匹目の犬の散歩は夫。夫は17時半—18時に帰宅、畑をしたり、趣味の日曜大工、外で子どもたちと野球。土日は夫は野球や自転車で遊んだり、ゲームもするが、子どもたちは基本的にゲームは禁止しているから、子どもはやらずに親がやる」(No.9)

「だいたい私。夫が子どもをみているかたち」(No.17)

「自転車にのる、宿題などは夫、それ以外の家事や育児は私(妻)。夫は家事・育児は忙しくてできない」(No.25)

「ほとんど私。洗濯は各自の家で、我が家は私。夫はそのへん手伝いなし。育児は、どうしても手が回らない時は「やって」という。(Q: もう少しやってほしい?) 仕事があるから、これも母の仕事かなと思って、やっていますね。」(No.41)

「ほとんど私。上の子子どもが手伝ってくれる。夫は夜遅い。上の子2人がバレーの時は家で下の子の面倒を見ることもある」(No.44)

「分担制」は5例あった。その特徴は、より具体的に決めている場合と手の空いているほうがやるというものであった。その妻の職種は、福祉職が2例、看護師が2例、販売員が1例でケア労働に従事している者が4例で、夫の職業は自営業が1例、自衛官が2例、消防士が1例、会社員が1例だった。

「私が食事の用意。夫は朝の子どもの支度、

火・水の次女の送り、火・金トランポリンの間、次女の世話・家事。（それ以外は妻）」(No.23)

「朝食は妻。妻が疲れていると感じたときは夫が作る。（本人・夫は）職場でも料理をするので、苦ではない。夕食は夫。（中略）洗濯は仕事から帰ってきて、つけおきしておいて、夜洗濯機をまわして干して寝る」(No.36)

「家事の分担はどちらかが手の空いているほうがやる」(No.37)

以上のように、家事や子育ての分担については、子どもが生まれてからは男性も協力的になっている傾向があるが、現在の生活においても妻が中心的な役割を担っているという特徴が見られる。なかには、女性自身が家事や育児などを自分でやらなければいけないという意識を持っているケースもあった。また、夫が協力している場合でも、ごみ捨てやお風呂洗い、洗濯、子どもを見る等のサポート的な役割で協力をしていた。

このように、女性が中心的にケア役割を果たす背景には、3つのことが考えられる。第1に、女性が家事や子育てができるような働き方をしていることである。子育てを中心にして、仕事の時間を決めており、その根底には女性がケア役割を中心的に果たすという意識が関係していると推察できる。第2に、性役割にそって、男女で就く仕事異なっていることである。例えば、女性は看護師や保育士、介護士、福祉施設の支援員などのケア労働に従事することが多い。「仕事」の項目でも整理しているように男性は仕事の変化が見られず、稼ぎ手としての役割を中心的に果たしている傾向がある。第3に、夫妻の働き方によって、家族で過ごす時間や家庭内での役割分担が規定されている点である。家庭で過ごす「時間」の配分（例えば、家にいる時間が長い方など）によって役割分担のありようが規定されていた。

以上のことを勘案すると、保育所を利用している世帯であるため、一見すると女性が働くことに抵抗感が無く、「女性＝ケア役割、家のことをする」という性別役割意識が低いように見えるが、女性

が中心的に家での役割を担っていた。この点については、家庭内の役割の配分をめぐって、どのようなことが関係しているのかについて、今後さらに議論していく必要があるだろう。

（5）出張や残業（休日出勤や夜勤なども含む）

ここでは、残業（夜勤なども含む）や出張などの有無と、その時、どのように育児や家事などのケアを行っているのかについて、夫と妻それぞれの特徴について論じていく。

1）夫の出張や残業の有無

「夫の出張や残業の有無」については、回答が得られなかったものを「不明」として記載して整理した（表3-4）。

表3-4 夫の出張や残業の有無

あり	26
なし	8
不明	3
休日出勤のみあり	2
残業のみあり	2

表3-4で整理したように、出張や残業が「ある」のが26例で最も多く、「なし」が8例、「休日出勤のみあり」が2例、「残業のみあり」が2例、「不明」が3例だった。「休日出勤のみ」や「残業」を含むと、出張や残業（自衛官の場合は演習）が30例あった。

2例（夫婦ともに公務員）は、妻の残業や出張と被らないように、夫婦でシフトや出勤時間を調整していた。しかし、他の28例には妻と予定を調整するという特徴は見られなかった。

2）妻の出張や残業の有無

次に、女性たち45例について整理をしていく。「出張や残業（休日出勤や夜勤なども含む）あり」が18例で、「出張や残業を減らしている」が3例、「出張や残業なし」が23例、「不明」が1例で、減らしているケースも含めると、出張や残業の有無がだいたい半数に分かれた。「なし」の特徴としては、アルバイトやパートの職員、農業や自営業に従事している人が多かった。また、「あり」では、

介護などの福祉関係の仕事や看護師などのケア労働従事者が多いという特徴があった。それ以外の職種で「あり」のケースでは、パートの場合は、「残業があっても1時間で済む」というケースもあった。

「減らしている」ケースでは、「夜勤があると夫や子どもに負担がかかるので、できるだけ病院に減らしてほしいと病院に言って、減らしてもらっている」という事例があった。

では、主に家族内でケア役割を中心的に引き受けている妻が家を空ける場合には、誰が子どもの世話をするのか。この点については、次節の「世話ができない時のケアの担い手」で整理をしていくこととする。

（6）世話ができない時のケアの担い手とサポート

ここでは、前節の内容も含めて、家族内で中心的な役割を担っている女性たちが育児や家事などができない場合、誰がケア役割を引き受けてケアを行うのかについて論じる。

1）妻が出張や残業で世話をできない場合

まず、前節でも出てきたように、妻が出張や残業の場合、どのようにケアを成り立たせているのかについて整理する。前節で「あり」と回答した18例を整理していくと、「夫」が8例、「妻の親・きょうだい」が8例、「ベビーシッター」が1例、「残業の時は自力」が1例だった。「残業の時は自力」のケースでは、「私は残業があるし、職場も日々勉強しなきゃいけないし…夫も出張があるので、日によっては長くいないということもある。保育園を19時まで延長して、一度迎えに行ったらまた職場に戻るとか。誰かに来てもらったということはない」（No.37）という事例があった。

以上のように、ケアの中心的な役割を果たしている妻が世話をできない場合には、「夫」や「妻の家族」が代わりにおこなっていることから、家族・親族内でケアを成り立たせていることが読み取れる。

2）冠婚葬祭や病気など、世話ができない場合

前節で妻が出張や残業で子どもを世話できない場合について整理をしたところ、「夫」や「妻の親

やきょうだい」が代わりにケアを行っていることが把握できた。では、冠婚葬祭や病気などの場合にはどのようにケアを成り立たせているのだろうか。

表3-5 冠婚葬祭などで世話ができない場合のケアの担い手（複数回答）

両親・きょうだい	38
ベビーシッター	1
自分たちでやりくり	8
上の子たち	3
パートナー・元夫	2
友人	1

表3-5（複数回答）を参照すると、「両親・きょうだい」が38例で最も多く、「自分たちでやりくり」が8例、「子ども（上の子たち）」が3例、「パートナー・元夫」が2例、「ベビーシッター」が1例、「友人」が1例あった。

例えば、「自分たちでやりくり」のケースでは以下のような内容があった。

「病気の時は日中保育所で見てもらって、夫が帰ってくるまで頑張ってみてもらう。冠婚葬祭とかはあまりない。あっても一方が見ているので」（No.17）

「最近、夫の親戚が亡くなり、通夜だけ一緒に行こうと思ったが、子どもを連れて行くとうるさくなるので、夫だけ通夜に出て、私は後から線香をあげに行った。電話で事情を説明して謝った。自分たちで何とかやりくりするしかない」（No.19）

「誰もいない。夫婦でやるしかない」（No.25）

「自分で出かけた時は夫に預ける。2人で出かけたことは無いかな。そういう時があれば、自分たち夫婦のどちらかに預けるか、妻の実家に頼る」（No.20）（今のところは自力で、万が一の時は両親ということで複数回答）

このように、他に頼れる人がいなく夫婦でやり

くりするしかないケースや、基本的には夫婦どちらかが子どもを見るように調整し、万が一の時には実家を頼りにしている事例があった。その背景には、実家が近くにないことや両親も働いていて世話が大変であるという背景がある。

以上のように、家族内でケアの中心的役割や責任は妻が引き受け、妻が子どもを見られない場合には、できるだけ家族や親族間でケアを成り立たせていることがわかった。

では、子どもが病気やケガをした時、予防接種を受けに行く時にはどこの病院に誰が連れて行くのかについて次節で整理していく。

(7) 予防接種・病気・けが

本節では、子どもが病気やケガをした時、予防接種を受けに行く時にはどこの病院に誰が連れて行くのかについて整理していく。回答が得られず、不明なものは「不明」と記載している。

1) 病院

まず、病気やケガをした時や予防接種の時にどこの病院に行くのかについて、「1ヶ所」の病院にかかっているのか、「使い分け」しているのかを含めて整理をしていく。

45例を整理していくと、「使い分け」しているケースが26例で最も多く、「1ヶ所」の病院にかかっているケースは18例、「不明」(回答が得られなかったケースを不明と記載)が1例であった。例えば、「1ヶ所」のケースでは、18例全てがA市で唯一小児科がある総合病院を受診していた。

次に、「使い分け」しているケースでは、予防接種は個人病院や診療所へ行き、病気やけがの時にはA市の市立病院、ごくまれに病気などでB市の総合病院へ行く傾向があった。A市の総合病院の小児科は24時間体制で良いと評価しているケースが多い一方で、予防接種で個人病院や診療所を選択する理由で共通していたことは、「予約」や「混雑」に関することだった。例えば、次のような内容である。

「予防接種は〇〇病院(個人病院)へ行く。市立病院だと時間がかかるし、色んな病気をもらいうリスクも高い」という事例や「予防接種は△△病院

ですね。予約がいらないので。他は市立病院ですかね」や「病気やケガだと市立病院。予防接種の時は〇〇病院(個人病院)。予防接種の時は曜日が決まっているので、〇〇病院。」「病気の時は市立病院。予防接種の時は△△病院や診療所などいろいろな所に行く。枠が小さかったり、曜日が決まっているので、市立病院は行かない」という事例があった。

その他に、病院への近さ・通いやすさが使い分けの背景にはあった。それは家庭内でケアの中心的担い手として役割を担っているために、仕事と子育て・家事に支障が出ないように調整していると読み取れる。

2) 病院に連れて行く人物

前項では予防接種や病気、けがをした時にどの病院へ連れて行くのかについて整理をし、用途によって病院を使い分けているケースが多いことがわかった。では、その病院へ連れて行くのは誰なのかについて、ここで整理していく。45例を整理すると、「妻」が29例で最も多く、「不明」(妻が語っているため、妻の可能性が高いが、誰が連れていくのかを確定できないため不明と記載する)が6例、「基本的には妻、都合があれば夫」が5例、「妻か妻の両親」が4例、「平日は妻、土日は元夫」が1例あった。

このように、病院に連れて行く場合にも、基本的には妻が中心となっており、妻が行けない場合には妻の両親か、夫が病院へ連れて行くという特徴が見られた。

(8) 時間

ここでは、現在の生活において、自分の時間の有無について整理していく(表3-6)。回答者45名のうち、妻が答えたものが42名、夫が回答したものが3名であるため、偏りが生じている。なお、回答がなく、不明なものは「不明」として記載している。特に、夫について「不明」なケースが23例あり、回答に偏りが生じている。

表 3-6 自分の時間の有無

妻なし・夫「不明」	18
夫婦ともに無し	13
妻なし・夫あり	5
妻あり・夫「不明」	1
夫婦ともにあり	8

表 3-6 で示したように、自分の時間の有無については、「妻も夫もあり」が 18 例で最も多く、次いで「妻あり・夫は不明」が 13 例で多く、「妻なし・夫は不明」が 8 例、「妻なし・夫あり」が 5 例、「夫婦ともに無し」が 1 例だった。ここでは、以下のような特徴が見られた。

第 1 に、妻で「あり」と答えたケースでは、「仕事」を自分の時間に含めているケースや「家族でスポーツ」、「友人とのランチや買い物」「録画したものをみる・TV」「読書（仕事関係の本が多い）」を自分の時間として挙げていた。

「働いている時間は自分の時間と言えるかな。子どもと離れているし、自分が好きで始めた仕事だから」（No.19）

「子どもを産むまではミニバレーをしていたが、産んでからは特にしていない。仕事が良い息抜きになっている」（No.26）

このように、女性たちの時間があるという回答の中には、「仕事」の時間を含めているケースや家族でスポーツをしていること、韓流ドラマや録画したドラマを子どもが寝た後の時間に見ているケースが見られた。夫の「あり」の中には、自分の好きな趣味の時間が含まれており、女性陣の方が子どもに合わせて自分の時間を作っている傾向が見られた。

（9）保育所の良い点と改善点

ここでは、保育所を利用するようになって感じた保育所の「良い点」と「改善点」について整理をし、保育所が子育て世帯にどのような役割を果たしているのかについて述べる。

1）保育所の良い点

まず、保育所の良い点について、得られた回答を整理した（表 3-7）。回答が得られなかったものについては、「不明」として記載している。

表 3-7 保育所の良い点（複数回答）

時間が持てる	3
子どもが楽しんでいる	4
子どもの成長・学習面・社会性	19
子どもを心配せずにいられる	1
食事面	5
企画・行事	5
働きやすさ・仕事面	10
対応・トレーニング・子育ての見本	18
延長保育・土曜日も見てもらえる	2
見てもらっているだけで十分	2
母親同士のつながり	1
不明	5

表 3-7 で整理したように、「子どもの成長」に関するものが 19 例で最も多い。その内容は、主に 4 つある。第 1 に、人付き合いや社会性が身についたことに関するもの。第 2 に、トイレなどのトレーニングの成果に関するもの。第 3 に、好き嫌いが減った、苦手なものが克服されたことに関するもの。第 4 に、子どもが成長したというものだった。

「色んな人と関わって社会性が着く」（No.6）

「子どもが人付き合いを学んでいる、トイレを並んで待てる。好き嫌いが無い」（No.7）

「何でもできるようになるのが早い。トイレとか。」（No.11）

「子どもが喋らなかったのが、保育所で友達と関わって話せるようになった。パンを食べなかったのが食べるようになった。茶碗を片付けたり、積極的になった。下の子はわがままが無くなった」（No.13）

「先生がとても良くしてくれて、気を配ってくれる。子どもも友達がたくさんできる」（No.15）

「野菜とかみんなが食べるから、食べるように

なって、好き嫌いが少なくなった」(No.18)

「子どもがすごい成長したこと。例えば、友人との関わり方、あいさつ、家ではやっていなかった遊びとか、絵も上手になった。上の子は手先は器用だけど、絵が下手だったのに描けるようになった。すごく成長していると思う。子どもの新しい一面がわかる。」(No.30)

次いで、「対応・トレーニング・子育ての見本」が18例だった。その内容としては、主に3つある。第1に、子どもの接し方に関するもの、第2に、トイレトレーニングなどに関するもの、第3に、連絡帳などで保護者とのかかわりに関するものである。

「保育園では、子どものことをちゃんと理解してくれて、接してくれるので、幼稚園とかになると、集団が大きくなるので、保育園だと1人1人に目を配ってくれている」(No.8)

「親が教えていないことを教えてくれるのが良い」(No.12)

「スプーンやトイレのトレーニングは保育所でやってくれた」(No.23)

「先生がみんな優しいこと。(中略)子どもに対しての教えやしつけがいい」(No.34)

「いろいろしてくれるので、子どもに合わせ。トイレトレーニングも先生が「今は待っていて、そういう時期が来るまで待ちましょう」と言ってくれ、そういう時期が来たときにやってくれた。家ではもらさないで切り替えが出来た。どこかでは無理にやってお母さんがストレスになっちゃったと聞いた」(No.35)

「子育ての見本がやっぱり、そこ(保育所)にある。保育園の先生は子どもたちをたくさん見ているから。こっちは感情論でやっている部分も良く対応してくれる、子育ての見本になる」(No.22)

「家でできないことを保育所でやってくれる(中略)アレルギーについても気を使ってくれる。連絡帳のようなノートを書いていて、しっ

かり書いて返してくれる。ありがたい」(No.32)

「子どもの面では、すごく良くしてもらっていて、聞けないことも聞けるし、自分だけで育てると集団での行動力にちょっと自由になってしまうので、こういう集団に入ること、絵本や読み聞かせを聞けるようになったり、集団の生活がいろいろ守れるようになったり、親が教えるよりも、先生が教えてくれることで教育の負担が減っている」(No.38)

さらに、「働きやすさ・仕事面」に関するものが10例だった。例えば、以下のような内容である。

「働き手としても働きやすい。続けられるのもこの職場だから。続けられる限り、続けたい」(No.8)

「保育所に預けると、やっぱり仕事に集中できる」(No.22)

「安心して仕事ができる」(No.32)

「仕事している時に預けられる。先生方も良い人ばかり。私は幼稚園出身だから、保育所はどういうことするのかわからないし、知らない。でも、働くには利用するしかなかった。子どもの面倒は専業主婦ならいいけど、働きながらはちょっと…。1人で子どもの世話をするのも大変だけど、専業主婦ならまだやれる。でも、働きに出るなら、みられない」(No.43)

次いで、「食事面」が5例だった。特に、保育所でアレルギーを配慮したり、バランスの取れた食事、お弁当を作らなくてよいという点に良さを感じていた。

「栄養のバランスを考えたごはん」(No.5)

「幼稚園には預けようと思っていなくて。毎日弁当を作るのがちょっと。そこが保育園は楽ですね」(No.21)

「卵アレルギーで朝夕、別々の献立を作るのが難しいが、保育所では栄養士がいろいろ調整してくれるので、嬉しい」(No.27)

同じく、「企画・行事」に関するものが5例だった。例えば、以下のような内容である。

「個性をのばしてくれる、いろんな企画、保護者の負担が少ない」(No.5)

「親子レクの後に担任と話しあう機会を持ったり、先生が熱心に取り組んでくれるので、満足している。親子レクは3ヶ月に1回。今月も参観日があって、子どもの1日の様子を見る」(No.36)

次いで、「子どもが楽しんでいる」が4例あった。

「子どもが楽しいこと、家にいるとそんなに人と触れ合えない。他の子どもと触れ合うと成長する。言葉など」(No.3)

「保育所だと他の子と遊ぶのが楽しみたいで行ってなかった時よりも行った方が良い。満足」(No.11)

「子どもが喜んでいっているのを見るだけで嬉しくなる」(No.32)

さらに、「時間が持てる」は3例あった。

「仕事してから、保育所に預けて自分の用事を済ませられるようになった。(中略)気晴らしの時間を作れる。それがないと、ストレス、子どもにも向き合えないと思う。子どものためにも自分のためにもいい。時間が持てる。土日以外で。自分は仕事が休みの日に病院に行ける。いきやすくなった。子どもをつれて買い物に行くと、余計なものを買わされる。(中略)何するにしても、子どもを連れてだったら、買い物もゆっくり見る時間がない」(No.1)

「時々、仕事が休みで療育もない日に保育園に預けることができ、自分の休みになるので良かった」(No.39)

「保育所に行っている間、仕事だけど自分たちが動ける時間がある」(No.41)

このほか「見てもらっているだけで十分」が2例、「母親同士のつながり」が1例、「子どもを心配せずにいられる」が1例だった。回答が無かった「不明」は5例あった。

2) 保育所の改善点・要望

ここでは、保育所を利用するにあたっての要望や改善してほしいことについて、45例の回答を表3-8に整理した。記録上、回答がなかったのか、改善してほしいことが無かったのかの判断がつかない部分があった。そのため、ここでは「なし」と記録されている事例については、表3-8で「なし」に分類する。特に、前節の「保育所の良い点」についても回答がなく、要望等についての記録もない事例については、「不明」に分類する。

表3-8 保育所の改善点・要望

利用・利用時間	5
保育料	5
対応・教育・しつけ	4
保育参観が少ない	2
24時間保育	1
夜間保育	2
病児保育	1
その他	1
なし	27
不明	1

表3-8で整理したように、半数を占めた「なし」を除くと、「利用・利用時間」に関するものが5例で最も多い。例えば、妊娠中に保育所を継続的に利用できないや、普段の保育所の利用に関するもの、保育所を利用できない場合の対応に関するものだった。

「下の子の出産に伴い、保育所が継続的に利用できなくなることは困った」(No.2)

「細かいことだけど、朝は保育所の中に入って名前を書くなどの手続きをしなければならない。保育所の入り口で子どもを渡せたらいいのと思う」(No.3)

「新型インフルエンザが流行った時に保育所

が閉鎖して（中略）私の仕事は休めないし、文句を言ってもしょうがないけど、その時は民間の保育園が3日間受け入れてくれた。すごい助かって感謝している。でも、受け入れる母体が足りないと思うし、何かダメな時のプランBが欲しい」（No.9）

「仕事が決まらなと申し込みもできない。ならし保育をみて、3週目から1日預かってくれるようになる。仕事を雇う側も雇いづらい。明日からうちに来てくださいという仕事が多いのに、自分は大丈夫だったけど（今の職場は配慮してくれた）仕事を辞めると、1ヶ月で退所させられる。1ヶ月は短い。仕事が無いのに」（No.16）

同じく、「保育料」に関するものが5例だった。その内容は、「保育料が高い」「保育料を下げてほしい」というものだった。例えば、以下のような内容である。

「市に対して、金額。土日休ませているのに、金額をかえて欲しい。保育所に1度、土曜日に預けた時に、『なんで預けるんですか？何時に帰ってくるんですか？何時ごろまで預けますか？14時に迎えに来てください』などと言われた。お金を払っているのに、何でそんなに話さないといけないのかなと思った。それから土曜日に預けることをやめた。子どもいない時の方が買い物や家事などがはかどる時もあるので、仕事終わってすぐに迎えに行けるとも限らない」（No.20）

「保育料を下げて欲しい」（No.24）

次いで、「対応、教育・しつけ」に関するものが4例だった。普段の対応に関するものや、違う市の保育所を利用した経験から、保育所の教育に関するものだった。

「子どもの鼻水など、もう少しこまめに見て欲しい」（No.3）

「保育園に教育を求めるのは違うと思うんですけど、B市では教育とかしつけや、悪いことは叱るし、ダメな時はダメだという。しつかり一人一人を見ていて、しつけが厳しい所だった。こっちは奔放な感じ、参観日も少ないし」（No.10）

「改善してほしいことは、モンスターペアレント、非常識な親には『これはちがうよ』と信念を持って対応してほしい」（No.22）

その他に、「夜間保育」が2例、「24時間保育」が1例、「病児保育」が1例、「その他・要望」が1例あった。「その他・要望」では、日常的事務に関するものがあつた。

「ありがたく思っているんで、荷物が多いからフックを大きくしてほしい以外は特になし」（No.13）

以上のように、要望や改善してほしいところは、保育料を含めて普段の利用に関するものであつた。しかし、半数以上が要望や改善してほしいところは無いと回答していた。その背景には、「みてもらっているだけで十分」という話や「保育料」の項目で語っていたように、「高い」と感じていても仕方ないという意識と関連していると考えられる。

（10）地域の条件と地域的な資源の制約

ここでは、「子育てのしやすさ」や「要望」に関する調査項目を整理し、このまちで生活する際にどのような制約があるのか、どのような良さがあつたのかを論じていく。

1）子育てのしやすさ

ここでは、A市で子育てをすることに對して、どのように感じているのかについて、45例の回答を整理していく（表3-9）。その際、「しやすい」「しにくい」ということについては主観的な側面が含まれているため、十分に留意する必要があるが、ここでは得られた回答の通りに、分類していく。また、回答が得られなかったものについては「不

明」として記載している。ただし、本調査結果はA市での子育てと他の町での経験を比較しているケースのほかに、A市での経験を念頭におかず、A市以外の都市をイメージして回答している場合も含まれる。

表 3-9 子育てのしやすさ

しやすい	22
しにくい	9
どちらともいえない	12
不明	2

表 3-9 で整理したように、子育てが「しやすい」と回答した人が 22 例で最も多かった。

その内容は、①自然の豊かさや環境に関するもの、②緊急時に対応できる病院や福祉に関するもの、③他の地域に行きやすいなどの立地条件に関するもの、④保育所の利用のしやすさ（待機児童なし）、⑤公園や遊び場、天文台に関するものである。

一方で、その中には「しやすい」と感じているが具体的な理由がないものや「しやすい」と答えながらも、不安なことや改善点について触れているものが含まれている。例えば、①母親同士の交流・情報共有の場の少なさ、②学力の低さと教育面でのおぼろげになってしまう、③保育所を利用できない場合や習い事の実施の選択肢の少なさ、④医療技術について触れているものがあつた。「しやすい」と回答したものについては、例えば、以下のような内容である。

「子育てしやすい。大きな病院、天文台、自然もある。B市にも行ける。学校も地域と交流がある。ただ、A市の学力は低い、それでも高校に入れる。ゆるい」(No.5)

「子育てしやすい。病院や遊び場がある。ただ、母親同士の交流が少ない」(No.6)

「しやすい。C市には実家があるが、車も多く、人も多く、ちょっと遊んでおいては出来ない。A市は放っておいても、泥だらけで帰ってくる。

都会のお母さんには信じられないと思われるかもしれないが、そこまで危険ではないし、楽。目が離せないC市よりは楽。しにくい点は保育園が使えない時や習い事などの選択肢が少ない。プランBがない」(No.9)

「A市は子育てしやすいまち。何でもそろっている。物質的なこと、医療の事、市からの支援とか。小学生以下は無料だし、小学生以上は割引あるし、子どもが病気にかかるのが便利。地域の人もお互いに顔分かって、子どもを見てくれるのがやっぱりありがたいと思う。子どもに関するものが充実している。あと、緑もあるし、四季もあるし、冬は寒いし海はないが、子どもが色々と体験できる。災害が無いことが一番安心。地震、台風、洪水がなくても、安全。人が困ることがなく、安定している。制度とか保険の心配はないが、医療技術が心配。(中略)高度の医療が必要とする時、対応できるのかと思う」(No.22)

「子育てしやすい。(中略)良い面は保育所に入りやすい、大きいお姉ちゃん(小学校)の学童保育もあるし、医療機関もかかりやすい。入院しようと思ったらすぐできる。遊べるところが多い。危ない人もいないし、大きなお店もプールもある」(No.29)

「A市は子育てしやすいですね。(中略)保育所と親密につきあえば、(しにくい面は)ない。力にもなってもらえるので、それなりに意見を聞き入れてくれるし、個人がオープンな感じだから、いいところだと思います。自然・環境もいいし、遊び場や緑がある方だと思いますし、冬はかなり雪が降っているが、冬のスポーツもあるし、A市は子育てしやすいまちだと思います」(No.42)

次いで、「どちらともいえない」が 12 例である。特に、病院の少なさや病院の待ち時間の長さ、子どもの遊び場の少なさに関するものがしにくさの一例として述べられていた。

「特別しづらいとは思わないが、しやすいとも思わない。病院の待ち時間が長い。小さい子どもが遊ぶところが街中に無い。スポーツや文化交流のための施設は遠い」(No.3)

「(A市以外) 他に住んだことは無いので分からないけど、C市は市長が力を入れているから、医療費が無料とか、フッ素が無料とか(中略) C市は夜も対応してくれるベビーシッター? そういうところがあって、A市にもそういうところがあれば、気兼ねなく預けられるかな。A市にも認可保育所があるけど、膨大なお金がかかるので。」(No.17)

「もう少し、その区その区で一個公園を作ってくれれば。みんな、スポーツや文化交流のための施設に流されてしまう。このご時世に、燃料をかけてもね。A市は子育てしやすいから、しやすいけど、しにくいって言えば、しにくい。どっちもどっち」(No.20)

「ここでしか育てていないからわからない。近所の人もいい人だし、町内会もある。子ども会のラジオ体操に子どもが行きたいといって、行かせても、近所のおじいちゃんが見てくれる。(中略)近所の人の目が多い。良く散歩をしていて声をかけられる。安心だなと思う。知り合いがいなかったの、嬉しかった。しにくい部分は、病院がない。子どもを預ける所ももっと数があるといい、遊ぶ場所があまりない」(No.32)

さらに、「しにくい」という回答が9例だった。その内容は、①病児保育や24時間保育がないこと、②福祉や医療・病院に関すること、③保育料に関すること、④子どもの遊び場の少なさ、⑤グループにとけこみづらいなどである。

「子育てしづらい。病児保育・24時間保育がない。他の人の家のことを干渉してくる人々が、人の家のことを口外する人が多いのを見てみると、自分の事も広まるのかなと思う。」(No.4)

「子育てしづらい。他の都市と比べて、医療や

福祉の制度面が充実していない。病院が選べない、専門医が1人しかいない、歯のフッ素に費用がかかる」(No.24)

「すごく住みにくい場所。遊びに連れて行く場はあるけど、1人で連れて行けない。子どもを連れて行く時にグループ行動をしている。(中略) C市だと、1人で連れてきて、その場で仲良くなりたい感じが、A市はグループを作って冷たい」(No.25)

「地方から来た人は友人を作らない限り、子育てしづらい。親がいない限り、自衛隊はグループを作っているの、とけ込んでいる人でないとつらい。地方の人は不安を抱えながらやっている人が多いのでは。(中略)住む場所によっては、公園はあるんですが、整備されていないので、遠くに連れて行かないといけないこともある。(中略)ママ友が固まっていて、特に会話に入っていくことは無い。話に入っていけない人に取ったら、難しいかな」(No.36)

以上のように、子育てのしやすさについては、保育サービス、医療や福祉などの制度面と実家などの頼れる人の有無によっても左右されている傾向があった。特に、市外から来た人にとっては、子育て支援センターや遊び場で友人ができたケースとすでに仲良しグループができて、中には入りづらかったというケースに分かれていた。ネットワーク形成の過程にどのような違いがあるのかについては、今後検討する必要があるだろう。

2) 要望

本節では、A市で子育てをするにあたって、どのような要望があるのかについて論じていく。

ここでは、A市で子育てをするにあたって考えた「要望」について、45例の回答を整理していく。なお、回答が得られなかったものについては、「不明」として記載し、要望が無い場合には「なし」と記載する。ただし、メモのとり方によっては回答がなくて空欄なのか、要望が無いために空欄となっているのかについて、判断がつかない部分がある。そのため、留意する必要があるが、前節の

流れで「要望なし」と判断つくものについては、「なし」として記載する。

その結果、要望「あり」が25例、「なし」が10例、「不明」が10例だった。

要望が「あり」は25例で最も多かった。その内容は、第1に、「医療費」の高さ・無償化に関するものが6例ある。第2に「保育料」の高さ（安くしてほしい）や金額のわかりづらさに関するものが5例ある。第3に、「夜間保育・24時間保育、病児保育、日曜日・延長保育」「保育所の人員」など保育所の利用に関するものが7例ある。第4に、「小学生の預け場所」や「(会社内も含めて)託児所・保育所」を増やしてほしいという要望が3例ある。第5に、「子どもの遊び場・ふれあいの場を増やしてほしい」が3例ある。第6に、オムツやゴミ袋、防犯グッズを配布してほしいが2例、第7に、授乳できる場所を増やしてほしいが1例、第8に「制度・助成」に関することや「情報」のわかりづらさに関するものが6例だった。第9に、除雪や道路整備をしてほしいというのが2例だった。第10に、行事の日程を保育所や小学校・中学校であわせないで欲しい、調整して欲しいというのが1例だった。

「医療費の負担。C市は中学生まで医療費・歯科も無料なのに比べ、A市は3歳まで初診無料、3歳からは1割負担で、積み重なると負担になると感じる。その面では、C市の方が住みやすいのでは？医療費の負担を軽減してくれることを望む」(No.31)

「児童手当は半年分まとめてくるので、子どもにあてなきゃと思いつつ、一気にあてるものはないので、とりあえず貯金。子どものために使わなきゃと思いつつ、それを忘れそうになる。毎月くれれば、オムツとかに使えるのだけど。子ども手当がなくても医療費を無料にしてくれたらいいのに」(No.36)

「去年から1歳の子どもがお餅をもらえるようになった。これはいらないので、同じお金を使うなら、小学生にヘルメット、防犯ブザーと

か命を守るものにしてほしい。保育料は自分で税務課に行って所得を調べて、それを保育の係に持って行ってはじめてわかる。同じ役所の中なのだから、中でやってほしい。妊娠しているときに大きなおなかで子どもを連れて窓口を移動するのは辛い」(No.3)

「観光に力を入れるのはわかるが、住んでいる市民に目を向けて欲しい。財政的に大変なのはわかっている。道路で必要なところは整備してほしい。ボコボコで車をはねて気になる。保育所の人員を増やしてほしい」(No.32)

「オムツをくれるとか、他の町だとゴミ袋をくれたりするみたい。だけど、A市はない。そういうのがあったらいいなと。医療費はS町だと小学校までかからないから、A市もかからなくなったらいいのになって。保育料が安くなれば…これが一番の願い」(No.30)

「日曜日も保育をしてくれる制度とかあればいいと思う。夜勤しているお母さんは祖父母がいないと、夜間の保育で困ると思う。シングルマザーの人とか高い無認可の保育所に一晩だけ預けたりしている」(No.39)

「夫の祖母か叔母に見てもらうしかない。夜勤があるので、夜間帯とか。認可外保育所はあるけど、働いても、お金が足りない。(中略)会社に預けるところがあれば。会議だって、実家に燃料代かけて預けに行って、会議による残業代は燃料代にもならない」(No.1)

ここでは、2つの特徴が見られた。第1に、保育所に預けられない場合の子どもの世話をどうするのか、と関係している。市内の保育所は日曜日や夜間保育をやっておらず、認可外の保育所は市内にあっても、利用の料金が高いため、利用しにくい。実家で見ってもらうケースが多いが、祖父母の負担や移動費の負担について触れているケースが見られた。そのため、24時間・日曜保育や夜間保育を希望していた。第2に、制度や情報のわかりづらさや市のサービスの制約があっても、本人がもつインフォーマルな社会資源・社会関係に

よって補っているという特徴があった。なお、調査時点では実施されていなかったが、その後、制度が変更になり、未就学の子どもを対象として、乳幼児等医療費の全額助成、小学生の入院費全額助成が始まった。

結果のまとめ

これまで本稿は、地方都市において子育てがどのように営まれているのか、その地域の特徴や地域の社会資源とどのように関係しているのかについて調査結果を整理してきた。その際、特に次の3点に着目してきた。第1に、その地域の社会資源や制度が子育て生活にどのように影響しているのか。第2に、本人が持っているインフォーマルな社会資源・社会関係が子育てとどのように関わっているのか。第3に、子育て生活をする際に、個人の行為や意識がどのように関わっているのかである。

(1) 地域の社会資源とのかかわり

ここでは、地域の社会資源や制度が子育て生活にどのように影響しているのかについてまとめる。

1) 妊娠・出産期の生活

妊娠・出産期では、A市で出産できる病院が1ヶ所しかないため、A市で働きながら出産する人や他のまちの病院を受診する時間や費用の捻出が難しい場合には、他の選択肢がないという状況があった。どこの地域、病院で出産するかは、実家がどこにあるかによっても関連しているが、仕事や時間の有無、費用や移動時間・手段などの有無によっても規定されていた。例えば、A市で出産することで感じた改善点や要望については、①市内には1ヶ所しかなく、病院の選択肢が少ないこと、②母子同室・個室がなく、エコーの性能が低いなどの病院の設備の不十分さ、面会の制限や出産方法が限定的、③待ち時間が長い、④市外の病院を受診費用が高い、⑤入院中の母親同士の交流がとりづらくなったこと、⑥市の対応のわかりづらさ、オムツを支給して欲しいなどである。

このような制限がある一方で、A市で出産する

ことの良さもあった。たとえば、①出産できる病院が1ヶ所で探さなくて良い・同じ医師にずっと診てもらえること、②実家近くで産めること、③病院が24時間、緊急時に対応してくれる、NICUも完備していることなどである。

また、保健師とのかかわりについても、周りに出産や育児のことを話せる人がいない場合や病気などで専門的な話を聞きたい場合に、専門職である保健師への期待が高まる傾向があった。保健師との会話で不安が解消されない場合や専門的な回答が得られない場合には不満が残るという事例があった。

2) 現在の生活

現在の生活においては、地域の社会資源の1つである保育所が生活にどのような影響を与えているのか。第1に、保育所が子どもと保育所に果たしている役割についてである。子どもは保育所に楽しく通っており、子どもにとって保育所はいろんな人と関わることで成長し、学習面や社会性を育み、バランスの取れた食事をとれるという側面があった。保護者にとっては、保育所を利用することで時間の使い方に幅ができたり、栄養士の考えたバランスの取れた食事を子どもが食べることができ、保育所が子育ての見本となるという側面を有していた。

第2に、A市内で利用できる市の保育サービスが限定的であるために、保育をどうするのかという制約があった。例えば、A市内の認可保育所では、延長保育を使っても見てもらえるのは19時までであり、日曜日や夜間の保育は行われていない。A市内で日曜日保育や夜間保育を行っている保育所は認可外の保育所のみであり、利用料が高く、利用しづらいという特徴があった。そのため、休日出勤や残業、夜勤などがある家族が子どもの保育をどうするのかという課題を抱えており、子どもの世話ができるように働き方を変えているケースや実家に預けるといったケースが見られた。

第3に、近くに親がいない場合や市外から来た際に、子育てがしづらいという特徴があった。また、転入型の場合にはすでにママ友でグループが

できているため、会話に入ることの難しさや、グループに溶け込むことができないなどの事例があった。A市で暮らした経験がない人にとっては、友人ができれば子育てをしづらい面があるという特徴があった。

（２）本人が持つインフォーマルな社会資源・社会関係とのかかわり

ここでは、本人がもつインフォーマルな社会資源・社会関係についてまとめる。

１）妊娠・出産期の生活

妊娠・出産期においては９割の人が実家のサポートを受けており、実家によるサポートが大きな役割を担っていた。例えば、それは家事や育児の手伝い、服のプレゼントなどの生活全般に関わるサポートだった。一方で、実家に頼れない・実家からのサポートが得られなかったケースでは、自衛官や公務員などの職種で夫婦ともに職場からの配慮や友人からのサポートを受けていた。例えば、妻は産休や育休を利用できた事例や、夫の職場の理解がある場合には、夫も産前・産後に休みを取って付き添っている事例があった。

２）現在の生活

保育所に預けられない時間や自分で子どもの世話をできない時に、実家や職場のサポートを受けていた。特に、実家が近くにあり、サポートを受けやすいという状況があるため、普段の子育てや生活スタイルの中に、主にケアの担い手として実家のサポートが組み込まれていた。一方で、実家からのサポートが得られなかったケースでは、自衛官や公務員などの職種で職場からの配慮や友人からのサポートを受けており、夫妻の時間の融通によって、夫妻のみでも子育て・生活ができている状態であった。例えば、夫妻のシフトを合わせて調整をしたり、急な発熱の場合にも夫妻ともに休みが取れる職場であるなどである。

以上のことから、妊娠・出産の時期から現在に至るまで、実家のサポートが大きく、仕事と子育てなどの生活を支える大きな役割を果たしていたことが読み取れる。その背景には、A市内やその近隣の町に実家があるケースが多いため、サポー

トを受けやすいという特徴がある。一方で、実家のサポートが得られない場合には、職場の理解や友人からのサポートがあり、夫妻のみでも子育て生活を営むことができていた。また、保育サービスなど地域の資源が限定的で、制約されている場面においても、実家や友人、職場など本人が持つ社会関係によって働きながら、子育て生活が営まれていた。

このように、本調査では誰からもサポートを受けられないというケースはなく、近くに人からのサポートを受けているという状態があった。

（３）個人の行為や意識とのかかわり

ここでは、個人の行為や意識がどのように関わっているのかについてまとめる。特に、家事や育児の分担、情報の入手に関してである。

１）妊娠・出産期の生活

妊娠・出産時の家事や育児などの家のことは、女性が中心に行っているという状況が９割を占めていた。妊娠・出産期は女性のほうが家にいる時間が多く、専業主婦になっている状況が見られた。女性の場合は、半数が仕事を続け、半数が妊娠時に退職をした一方で、男性の場合は、妊娠・出産の時期で働き方に変化は見られなかった。特に、仕事を続けた女性の３割が産休や育児休業を利用し、残りは仕事の量を減らし、休み休み働いていた（制度の利用が不明なもの・制度を利用していない場合を含む）。

また、「定住型」や「Uターン型」で近くに親や家族が住んでいる場合、普段の生活の中で育児や出産についても話を聞いている傾向があった。他の都市からきた「転入型」のケースでは、インターネット、市役所、母親教室の利用や「友人やママ友」、保育士や看護師などの専門職に就いていることで「職場・職場関係者」から情報を聞いている傾向があった。ただし、地域類型と情報の入手による特徴については傾向であり、今後も検討が必要である。

２）現在の生活

家事や育児については、子どもが生まれてから男性も協力的になった傾向があるが、女性が中心

的に家での役割を果たすという状況は続いていた。また、女性はパートやアルバイトなどの雇用形態をとり、家事や育児などができるような働き方をしていた。その中には、家事や育児などは女性の役割と意識して役割を担っている事例もあった。

(4) おわりに

①地域の社会資源、②本人が持つインフォーマルな社会資源、③本人の行為・意識の3つに注目したことで得られた、論点と課題を以下に提示する。

第1に、地域の社会資源と本人が持つインフォーマルな社会資源との関係である。特に、地域基盤の有無によって子育て様式にどのような違いが生まれるのかという点である。本調査協力者の生活は、限定的ではあるが、地域の社会資源とインフォーマルな社会資源の両方を利用して営まれていた。本調査では、保育サービスなど地域の社会資源が限定的で、制約されていても、実家や友人、職場などの本人がもつインフォーマルな社会資源によって、働きながら、子育て生活が営まれていた。その際、地域基盤の有無によって、子育て様式に違いをもたらしている場合があった。例えば、A市内に実家がある場合や近隣の都市に実家がある場合には、自分で見られない時には実家で子どもをみてもらうことができ、実家からのサポートによって生活が支えられていた。そのため、実家からのサポートが無ければ、仕事をしながら子育てをすることが難しいと推察される。一

方で、実家からのサポートが得られない場合には、職場からの配慮や友人からのサポートを得たり、夫妻でシフトを調整し、夫妻の時間の融通で子育て生活が営まれている事例があった。

このように、近くに実家があってサポートを得られる場合と実家からのサポートが得られないなどの地域基盤の有無によって、本人が持つインフォーマルな社会資源の利用や子育て様式に違いが見られた。また、地域の社会資源が制約されている場合でも、本人が持つインフォーマルな社会資源によって生活が営まれていた。一方で、本調査結果からは利用できるインフォーマルな社会資源がない場合や限定的な場合に当該地域でどのように生活を営んでいるのかについては、考察できなかった。そのため、この点については、今後も検討をしていく必要があるだろう。

第2に、家事や育児など家族の中でどのように役割を分担しているのか、その際、何が関係しているのかについてである。本稿では、家事や育児の分担について、本人の行為や意識に着目して整理してきた。その際、ケア役割＝女性が担うものという性役割意識や夫妻の働き方・時間によって家族の中で役割の配分が規定されている部分があると推察できたが、十分に議論することができなかった。そのため、今後、議論を重ねていく必要がある。

(北海道大学大学院教育学院・博士後期課程)